第3章　死後の世界

ところで、死んだ後はどうなるのでしょうか？

……また一体唐突に何の話しをするのかと思われるかもしれませんが、これもまた、私にとってはずっと考えてきた切実な問題であり、この世に生まれてきた以上、死ぬまでに解答を与えなければならない、最重要問題の一つです。

この疑問の答えとして、例えば宗教では「魂」とか「あの世」とか「輪廻転生」とかいう概念を用いて解答している場合が多いのではないかと思います。

もちろん、それが正しい可能性もなくはないのかもしれませんが、ここではもうちょっと現実的に考えて、そういったスピリチュアルなことを除外して考えたいと思います。

そうすると、おそらく大部分の人は以下のような考えをもっているのではないでしょうか。

「死んだ後は、**無になる**」

実際、アンケートをとってみるとそういう考えの人が日本では多数派らしいです。

……しかし、では、「無になる」とはいったいどういうことでしょうか？

その素朴なイメージは、「**死んだ後は永遠の無が待っている**」というようなものだと思います。

しかしよく考えてみると、そのような考えには実は、以下の三つの**間違った前提**が含まれていることがわかります。

一つ目は、**無を時間的な存在であるかのように捉えている**ことです。「無」は文字通り時間も空間も存在しない状態です（「状態」などと呼んでよいのかは不明ですが）。よって「永遠の無」という言葉は形容矛盾であってナンセンスです。

二つ目は、**無を対象として扱っている**ことです。無は「存在しない」ことです。だからなにかの対象である事はできません。無には誰にも「なる」ことなどできないのです。

そして三つ目は、**死んだ後も何か連続した主体的なものが残り続けると暗黙裏に仮定している**ことです。「無になる」と言っていますが、いったい**何が**無になるのでしょうか？　死んだ後には私はもう存在していないので、無だろうがなんだろうが何かになる「私」という主語はもう存在しません。私は死んだ後は何にもなれないのです。

そう考えると、「死んだ後はどうなるんだろうか？」という問い自体が疑似問題であって意味を成さないナンセンスなもののように思えてきますが、そこで思考停止せずに、この問いがいったい何を意味しているのかについて、本章ではもうちょっと考えてみたいと思います。

3.1 死後の世界のトリレンマ

そもそも、この＜わたし＞という意識的主体はなぜ存在しているのでしょうか。

第 2 章でみてきたように、＜すべて＞の内部にはあらゆるパターンが可能であり、その中には当然＜わたし＞という意識を生じるようなパターンも含まれるのでした。しかし、そのような無数の＜わたし＞のなかの一つとして、他でもない「この」＜わたし＞が今この瞬間に「この」私の前に＜わたし＞として＜選択＞され、ここにこうして現れている、ここに必然性はあるのでしょうか？

ここで、ややこしいのでここでちょっと概念を整理したいと思います。

＜すべて＞からの抽出パターン内に生じる意識一般をこれまで通り**＜わたし＞**と呼び、その中でも他でもない「この」私の前に今現在立ち現れているこの＜わたし＞のことを特に**＜現わたし＞**と呼ぶことにします。そして＜現わたし＞が立ち現れる場となるような仮想的な主体のことを**＜現＞**[16]と呼ぶことにします。ちなみに、単に**「私」**という場合は、肉体をもってこの世界にこれまで人生を歩んできた時間的連続体としてのこの私のことを指します。

＜わたし＞

＜選択＞によって＜すべて＞の内側から＜世界＞を生じさせる主体となる、（一般的な）主観的意識体験/意識現象。

---

16 なお、＜現＞は永井均氏のいうところの〈私〉（無内包の現実性）とほぼ同義だと思われます。

＜現わたし＞

あらゆる＜わたし＞の中でも、他でもない「この」私の前に**今現在**立ち現れている、「この」＜わたし＞。

＜現＞

＜現わたし＞が立ち現れる場となるような、仮想的な主体。あるいは舞台やスクリーンのようなもの。

「私」

肉体をもってこれまで人生を歩んできた時間的連続体としての、この私

そうすると、「死んだ後は無になる」という言葉は、「**「私」が死んだ後は＜現＞にとって＜現わたし＞は生じなくなる**」、と、より明確な形で言い換えることができます。我々が素朴に「死んだ後はどうなるんだろうか？」と問うとき、暗黙裏に「死んだ後」を経験する主体として仮定しているものが＜現＞に他ならない、と考えてよさそうです（もちろんそのような＜現＞なるものが果たして意味を持つのかどうかはかなり怪しいことに注意してください。それはほとんど「魂は存在する」と主張しているようなものかもしれません）。

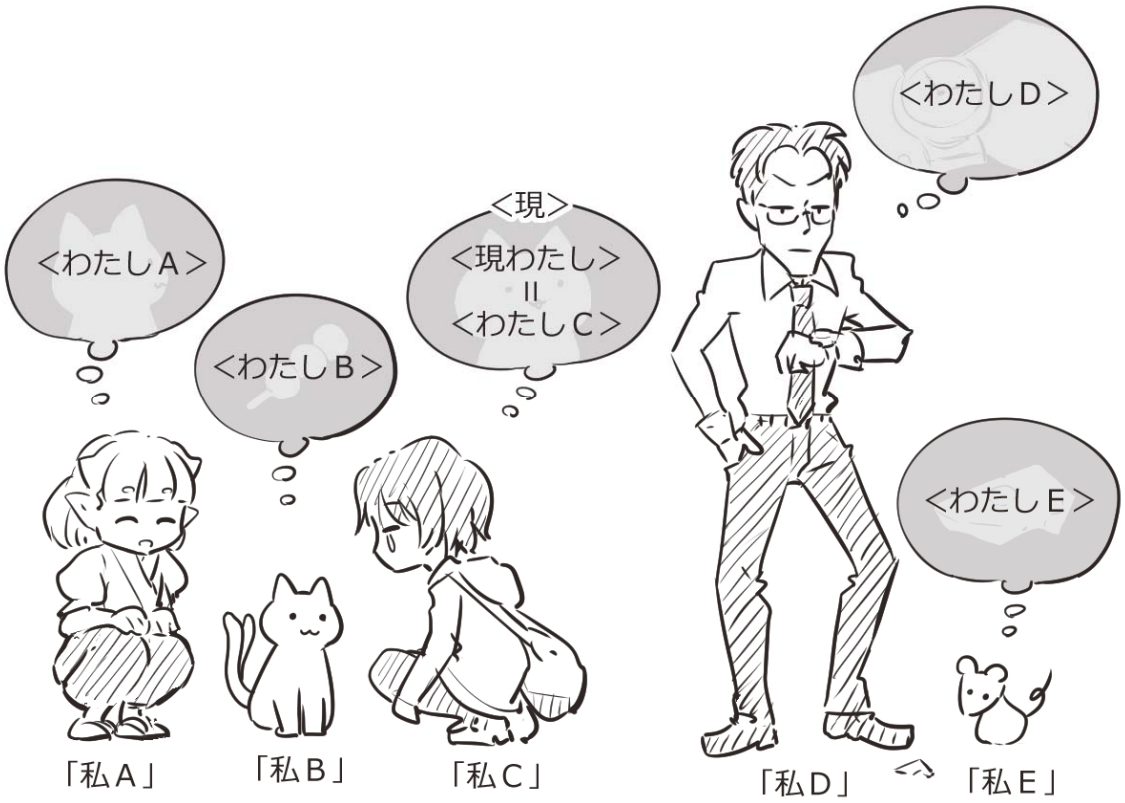


図　「私」、<わたし>、<現わたし>、<現>

……しかし、よく考えてみたら、<現わたし>が存在しない<現>、などということはあり得るのでしょうか？

現に、<現わたし>は今この瞬間にもここにちゃんと現れていますし（私は哲学的ゾンビではありません）、<わたし>という主観的意識は生まれてきてからこれまでずっと続いてきたように感じられます（なお生まれる前については記憶がないため意識があったのかどうかそもそも不明なので除外します）。

それは何故かと考えてみると、仮に<現わたし>が存在していないような<現>があったとしても、そのような<現>は<わたし>として知覚されることがないため、意味をなさないからです。たとえば夢を見ずに寝ているときとか意識を失った時の事を考えてみて下さい。主観的には、そのような状態は<現

＞として経験されないため、一瞬で目が覚めたように感じるはずです。

すなわち、そういった＜現＞は人間原理的に排除されるのです。

そう考えると、＜現＞を時間的に連続し続ける主体として仮定する限りにおいて、「＜現わたし＞は常にありつづける」、ということが言えるように思えます。

ここから何が言えるのでしょうか？

一つの可能性は、やはり＜現＞などという主体を考える事がそもそもの誤りであって、「死んだ後はどうなるんだろうか？」という疑問は疑似問題であってナンセンスだということです。その場合、二つのパターンが考えられます。ひとつは**A：＜現＞を肉体的な「私」と同一視するパターン**で、その場合、この「私」が死ねば、それ以降について問うことはまったくナンセンス、ということになります。もう一つは**B：＜現＞を＜現わたし＞と同一視するパターン**で、その場合、存在するのは「今この瞬間」だけであり、それ以外について考えるのは死んだ後だろうが１秒後だろうがまったくナンセンス、ということになります。

しかしもしそうではなく、＜現＞を何か独立した主体のように考えるのであれば、先ほどの「＜現わたし＞は常にありつづける」、という仮説により、この「私」が死んだ後も＜現わたし＞は別の「私」上の＜わたし＞として＜現＞の前に現象し続ける、ということが言えてしまうように思えます。いわゆる、**C：輪廻転生**です。

ここに新たなトリレンマが誕生しました。名づけて「**死後の世界のトリレンマ**」です。

死後の世界のトリレンマ

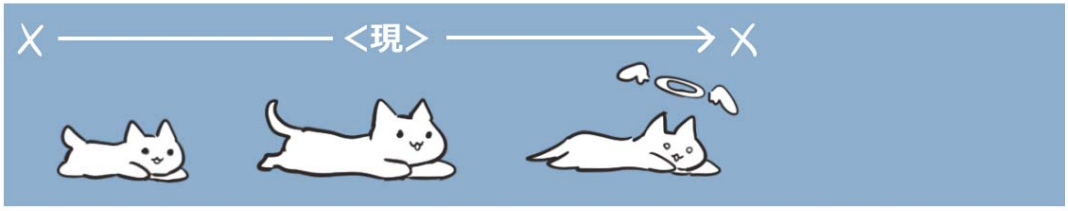
- ✓ A：**＜現＞＝肉体的な「私」説**：
  ……「私」が死んだ後の＜現＞などない。無。
- ✓ B：**＜現＞＝＜現わたし＞説**：
  ……在るのは「今この瞬間」だけ。一秒後の＜現＞などない。無。
- ✓ C：**＜現＞は独立した主体説**：
  ……＜現＞は輪廻転生する。

ここで、最初のふたつについてはもっともらしくはありますがそれ以上考えようがなさそうなのでとりあえず一旦置いておくとして、（あきらかに一番怪しげな説ではありますが）最後の**輪廻転生説**をとりあえずのとっかかりにして、以降考えていきたいと思います。

……最初に「宗教とかスピリチュアルとかの系統を除外すれば」などと言っておきながら輪廻転生などという怪しげな考えを持ち出すとはどういうことか、と思いますが、宗教やスピリチュアルと違うのは輪廻転生する主体が「魂」ではなく＜現＞である、ということです（逆に言えば違いはそこしかありません）。なのでこの違いがなんなのかをまずみていきたいと思います。

＜現＞とはいったい全体何なのでしょうか？

A：<現> =「私」説



B：<現> = <現わたし> 説

C：<現> は独立した主体 説

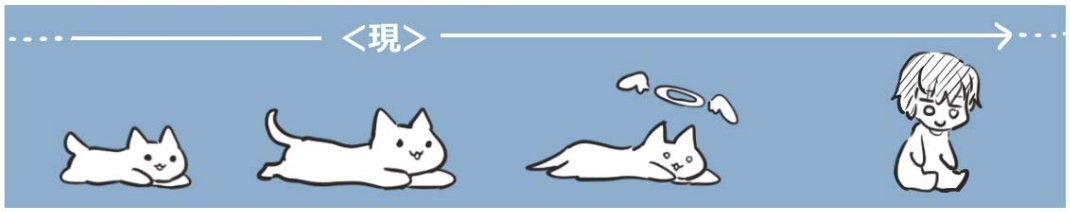


図　死後の世界のトリレンマ

3.2 「魂」と＜現＞

前節では、＜現わたし＞や＜現＞という概念を導入することで、「死んだ後は無になる」という素朴な主張を、「死んだ後は＜現＞にとって＜現わたし＞は生じなくなる」と、より明確な形で表現しました。

これにより、「死んだ後はどうなるのか？」という問いは、「死後の世界のトリレンマ」として３通りの解釈へと分類できると考えられます。以降、そのうちの最後の「輪廻転生説」をとりあえずの足がかりにして、この問いについて考えていきたいと思います。

さて、輪廻転生ということで、まず、一般的に言われる「魂」というのはどういうものかと考えてみます。

Wikipedhia で調べてみると「霊魂」という項目名になっていますが、概要を一部引用してみると、

> 肉体から離れたり、死後も存続することが可能と考えられ、体とは別にそれだけで一つの実体をもつとされる、非物質的な存在。
>
> （Wikipedhia「霊魂」の項目より）

ということらしいです。

勝手なイメージとしては、輪廻転生する主体としての「魂」はしばしば記憶とか人格とか、前世の「私」の情報を保持していて、それによって前世の記憶が引き継がれたりといった怪しげなことが起こったりするもののように思います。少なくとも、Wikipedhia にも書かれているようになにか「実体」をもったものです。

一方、＜現＞は先に書いたように＜現わたし＞が生じる舞台、あるいはスクリーンのようなもので、何か実体があるようなものではありません。当然そこには記憶とか人格とかの情報は一切含まれていません。

しかし実体をもたないものが輪廻転生の主体になり得るというのは妙なものです。いったい**「何が」**その連続性を担保しているというのでしょうか？　**「何が」**輪廻転生するというのでしょうか？　やはりそんなものは幻なのでしょうか？

それを理解するための手がかりとして、＜現＞とはいったいどういう性質をもったものなのか、ということを次に調べてみたいと思います。

3.3 ＜現＞の性質その１：スワンプマン

ところで、スワンプマンという思考実験があります。
要約すると以下のような内容です。

オリジナルバージョン：
「私」は道端を歩いていると突然雷に打たれ、死亡する。しかしその直後、近くの沼に再び雷が落ちてきて、「私」と全く同じ分子配列・記憶等を持った「私」の完全なるクローンが奇跡的に生成され、何事もなかったかのように「私」として歩き去って行く

奇妙な話ですが、この思考実験で問題となるのは＜わたし＞という主観的意識の連続性についてです。すなわち、＜現＞の連続性についてです。有名な思考実験であることもあり、＜現＞の性質を考えるにあたり、まずこの思考実験をモチーフにして考えてみたいと思います。
以後、わかりやすく、死ぬ前の私を「私Ａ」、雷によって沼から再構成された私を「私Ｂ」、それぞれの主観的意識を＜わたしＡ＞、＜わたしＢ＞と呼ぶことにします。

さて、これを＜現＞という概念を使って整理してみると、まず「私Ａ」が死ぬ前は、当然＜現＞の前に＜わたしＡ＞が現象している、ということが言えると思います（言える、というかそういう前提です）。
一方、「私Ａ」の死後、沼から現れたスワンプマンたる「私Ｂ」の主観上に生じている＜わたしＢ＞は、直感的に考えると明らかに＜現＞の前には現象していないように思われます。

　では、ここから色々オリジナルバージョンを改変していって、どういう条件で＜現＞が連続し、どういう条件ではしないのか、ということを（あくまで直感によってですが）考えていきたいと思います。
　まずは以下のような内容です。

バージョン１：
　「私Ａ」は道端を歩いていると突然雷に打たれ、死亡する。しかし数秒後、奇跡的に心臓が動き出し、「私Ａ」は息を吹き返して立ち上がり、そのまま何事もなかったように歩き去る。

　要は気絶して復活した、ということです。この場合、明らかに倒れる前後の＜わたしＡ/B＞は＜現＞として連続しているように思われます。
　しかしよく考えてみると、これはオリジナルバージョンと何が違うのでしょうか？　私を構成する分子の物理的な同一性でしょうか？

　では、以下の様な場合ではどうでしょうか？

バージョン２：
　「私Ａ」は道端を歩いていると突然雷に打たれ、死亡する。その際、私の身体を構成するすべての分子は雷の力によってバラバラに分解され、ドロドロに溶けて水たまりになる。しかしその直後、その水たまりに再度雷が落ちてきて、元々「私Ａ」を構成していたすべての分子をそっくりそのまま用いた、新たな「私Ｂ」が奇跡的に生成され、そして何事もなかったかのように歩き去って行く。

このケースにおいて、＜わたしＢ＞は＜現＞の前に連続して現象するのでしょうか？　それともしないのでしょうか？　これは何とも言えないように思いますが、おそらくどうも、＜現＞の連続性を物質的な同一性に還元しようとするとおかしなことになるのだと思われます。

では、物質的に異なっていても意識が連続し続けていれば＜現＞は連続するのではないでしょうか？　以下の様な場合を考えてみます。

バージョン３：

「私Ａ」は道端を歩いているとふと足を滑らせて、近くの沼に落っこちる。その直後、沼に雷が落ちて「私Ａ」の完全なるクローンの「私Ｂ」が生成される。

ここで、「私Ａ」と「私Ｂ」は雷によって奇跡的に生成された謎の装置によってなぜか脳が接続されており、意識が完全に共有されている。しかし、共有している最中に「私Ａ」は突如として心臓発作に襲われて、死亡する。

その後、装置は安全に外され、「私Ｂ」は何事もなかったかのように歩き去って行く。

これはどうでしょうか。もしかしたら＜現＞は＜わたしＢ＞へと連続するように思われるかもしれません。

しかし連続すると考えると妙なことになります。次のような場合です。

バージョン４：

「私Ａ」は道端を歩いているとふと足を滑らせて、近くの沼に落っこちる。その直後、沼に雷が落ちて「私Ａ」の完全なるクローンの「私Ｂ」が生成される。
ここで、「私Ａ」と「私Ｂ」は雷によって奇跡的に生成された謎の装置によってなぜか脳が接続されており、意識が完全に共有されている。
その後、装置は安全に外され、「私Ａ」と「私Ｂ」は何事もなかったかのように歩き去って行く。

仮にバージョン３において＜現＞が＜わたしＢ＞へと連続するとした場合、このケースでは＜現＞はどちらに連続するのでしょうか。それともやはり＜わたしＡ＞だけに連続し続けるのでしょうか。

あくまで思考実験ではありますが、以上からわかるのは、おそらくどうも、＜現＞をなにか連続して存在し続けるものと考えようとすると色々と矛盾したケースが考えられてしまう、ということです。

少なくとも、物質的な同一性はその連続性を保証しないと思われます。例えば、ある知覚情報をコードするニューロンは時間経過と共にまったく別のものに置き換わってしまう、という知見があるようです（”Representational drift”と呼ばれる現象のようです）し、そもそも身体を構成する原子は絶えず入れ替わり続けているようですし[17]、さらにそもそも、第２章でも述べたように、ミクロな素粒子のレベルから見れば同種粒子は区別がつかないので、「物質的同一性」

[17] ただし中枢神経系を構成する原子は入れ替わらないという話らしいですが http://book.bionumbers.org/how-quickly-do-different-cells-in-the-body-replace-themselves/

という概念自体が幻想であるとも言えます。

しかし、それにも関わらず、やはり**＜現＞として「これ」が連続して生じ続けている**。これは疑いようのない主観的事実です。＜現＞が連続し続けるものと考えなければ、私の目の前に連続的に生じ続けている「これ」の説明がつきません。

これはいったいどう考えればよいのでしょうか。

その手がかりをつかむためには、＜現わたし＞という現象的意識そのものを詳細に観察し、分析することが必要であるように思われます。もちろんそれができるのは現象的意識それ自体によってだけなのではありますが、そのあたりの方法論を確立したとみられる人物が、実は歴史上に存在しています。

昔インド近辺に住んでいた、ゴータマ・シッダールタ氏という人物です。

3.4 ＜現＞の性質その２：ヴィパッサナー瞑想

ゴータマ・シッダールタ氏は仏教の開祖として特に有名ですが、宗教については置いておいて、氏が悟りと称する状態に至るまでに行った実際的な方法に着目したいと思います。

それはいわゆるヴィパッサナー瞑想と呼ばれるもので、簡単に言えば、＜現わたし＞をひたすら明晰に詳細に観察し続ける、というものです。そこから明らかになったことは、一見すると連続的に生じ続けているようにみえる＜現わたし＞は、実はミリ秒単位だとかなんとかいうものすごい速度で瞬間瞬間に生成消滅し、移り変わり続けており（諸行無常）、そして＜わたし＞はそのような生成消滅し続ける＜わたし＞の諸断片の集まりにすぎず、中心的実体がない（諸法無我）、ということです。そしてそこから、あらゆる一切は中心的実体のない「空」であり、それらのつながりとしての「縁起」によって一切は生起している、という思想に繋がっていったものと（あくまで私の理解ではありますが）考えています。

ここで注目すべきは、「**＜現わたし＞は瞬間瞬間に生成消滅し、移り変わり続けており**」、さらに「**中心的実体を持たない**」ということです。ここから想像できるのは、＜わたし＞は**単位構成要素**に分解することができ、そしてそのような諸単位＜わたし＞が情報的に統合されることで、あたかも単一で連続的な＜わたし＞なるものが存在するかのように錯覚されているのだ、ということです。

それらの単位構成要素は「風の音」とか「かゆみ」とか「甘い」とかいったいわゆる「クオリア」に対応すると思われるので、とりあえず「**単位クオリア**」とでも呼ぶことにします。

＜わたし＞がそのように「単位クオリア」によって構成されていると考える

と、＜現＞もまた、還元するとそのような単位クオリアとして、連続して生じ続けていると考えられます。

しかし、やはり問題は何も解決されていません。

＜現＞を何か連続して存在し続ける主体として考えるとおかしなことになるのでした。では、それでもなぜ、それぞれの単位クオリアを眺め続ける、連続して存在し続ける主体であるかのように＜現＞はここに立ち現れているのでしょうか。

3.5 ＜現＞の連続性は記憶が作りだした錯覚？

3.3 節からここまで、＜現＞がどういう特性を持っているかを見てきましたが、これまでの話から、

① ＜わたし＞は「単位クオリア」に分解でき、＜現＞は主観的事実として、それらの単位クオリアを連続的に見続けている主体のように振る舞っている。
② 一方で、＜現＞は物質的同一性にはおそらく還元できず、また連続して存在し続ける主体と考えると色々とおかしなことになる。

という矛盾した性質が導かれてしまいました。
はたして、この矛盾はどのように解消したらよいのでしょうか？

ひとつの方針として考えられるのは、そもそも＜現＞の連続性というものが錯覚に過ぎない、と考えることです。
すなわち、**＜現＞の連続性は記憶が作りだした錯覚にすぎない**、と考える事です。

例えば、なんらかの超常現象が起きて＜現＞が１年前の私へとタイムススリップした、と考えてみます。＜現＞が移動した以外は、記憶などの引き継ぎは何も起こらないとします。
その時、その１年前の私は「＜現＞が移動した」というその事実に気がつくでしょうか？
気がつかないはずです。＜現＞にとっては、＜わたし＞は１年前の私として

何も変わらずに生じ続けているようにしか感じられないはずですし、１年後からタイムスリップしてきたなどとはまったく気づかないでしょう。なぜなら＜現＞だけが移動したところで、１年前の＜わたし＞は１年前の＜わたし＞の記憶上でしか連続していないからです。

あるいは逆に、今こうして原稿をタイプしている最中の私の＜現＞は実は１０年前の＜わたし＞から一瞬前にタイムスリップしてきたのかもしれません。しかし、仮にそれが事実だとしても、私はそのことに一切気がつかないでしょう。私が今見ている＜現＞の連続性は、この瞬間の私の記憶の連続性によってのみ担保されているのです。

……そのようにして、＜現＞の連続性を記憶が生みだす錯覚であると考えるならば、最初の①、②の矛盾は一応解決するように思われます。

＜現＞の連続性は「主観上では」成立しているので①が成立しますし、でもそれはあくまで錯覚に過ぎないので②も同時に成立します。

ではこれで問題は解決、でよいのでしょうか？

しかし、そう考えるとある疑問が湧いてきます。

＜現＞が**どのような＜わたし＞であったところで**、記憶の連続性によって＜わたし＞は連続しているように感じられる、ということはわかりました。

ではそもそも、**なぜ＜現＞はこの瞬間の、この＜わたし＞なのでしょうか？**[18]

---

[18] これはいわゆる「なぜ私は私なのか」という問いを＜現＞という概念を使って言い換えたものです。

そこになにか理由はあるのでしょうか？

3.6 なぜ＜現＞はこの＜わたし＞なのか？（前編）

まず、主観的な事実として、ふたつの前提を挙げたいと思います。

・前提１：

＜現＞はただ「これ」のみ。「あっちの＜現＞」とか「この＜現＞」とか「あらゆる＜現＞」のような言い方はできない。スクリーンは「これ」ひとつしかない。

・前提２：

現に、「この＜わたし＞」が＜現＞として生じてしまっている。これは主観的事実である。

これらは主観的な事実なので、問答無用で正しいと言えると思います。

この前提を踏まえた上で、**「なぜ＜現＞はこの＜わたし＞なのか？」**という問題について、以下考えてみます。

しかし、そうはいってもそれを説明する理屈は、おそらく以下のふたつしかないように思われます。

すなわち、

イ)　**「この＜わたし＞」だけが＜現＞としてあり得る**。それは**唯一の必然**である。

ロ)　**可能なあらゆる＜わたし＞が＜現＞であり得る**。よってそれは**ただの偶然**である。

です。

さて、まず仮にイ）を正しいとした場合、＜現＞が刻一刻と移りかわり続けて生まれてからこの瞬間までこの私として人生を送ってきたと思っていたのは実は記憶が生みだした錯覚に過ぎず、実際には＜現＞はただ唯一、この瞬間の「この＜わたし＞」だけを永遠に繰り返し続けている、ということになります。

もちろんそれが絶対に間違っている、ということは証明できませんが、これは明らかに無茶な考えに思います。ここでいう＜現＞は「あらゆる＜現＞」などではなく、「普遍的な、唯一の＜現＞」なのです。なぜ今この瞬間にキーボードをタイプしている「この＜わたし＞」がそんな宇宙全体に唯一存在する神のような謎の特権性を持っているのでしょうか。

よって、「普通に考えて」、おそらく正しいのはロ）だと思われます。

すなわち、2.0 節の方針でもあげたように、**コペルニクスの原理**です。

＜すべて＞の内部には、＜現＞としてありえる無数の＜わたし＞というパターンが、いくらでも可能なのでした。だから、そのうちのどれか一つが＜現＞として現れたところで、それはただの偶然にすぎない、と考えるのは至極当然のように思います。

なのでこれは一見、とても納得がいく解答に思えます。「この＜わたし＞」は**何ら特別ではない**のです。

しかし、よく考えると、この解答は実はかなりとんでもないことを言っていることに気がつきます。

「可能なあらゆる＜わたし＞が＜現＞でありえる」

……つまり、単純に考えると、**＜現＞はあらゆる＜わたし＞に輪廻転生する**、ということになってしまうのです。

ちょっと待って下さい。

ここまでの話では、輪廻転生する主体として、魂ならぬ＜現＞というものを仮定しようとしたのでした。しかしそのような＜現＞なるものはなんら連続性をもった主体になり得るようなものではなく、輪廻転生などといったところで、**輪廻転生する主体的なものは何もない**のです。

にもかかわらず、「**あらゆる＜わたし＞は＜現＞でありえる**」のです。そう考えないと「この＜わたし＞」があらゆる＜わたし＞の中で何か特別なものであることになってしまいます。

この矛盾はどう考えたらよいのでしょうか？？？？

前提 2 については、ちょっと否定のしようがないと思います。

なのでまず考え得るのは、とりあえず前提 1 を否定してみることです。

すなわち、＜現＞はひとつではなく無数に存在し、それぞれの＜わたし＞ごとのそれぞれの＜現＞がある、と、とりあえず考えてみることです。

この考えの例え話として、宇宙人が地球にやってきて、地球人のうち一人を無作為に選択して UFO で拉致する、ということを考えてみます。

このとき、連れて来られた人からすると、「なんで地球人が 70 億人以上もいるのに、よりによってたまたまこの私が連れて来られたのか？」という疑問が生じると思います。

しかし、よく考えてみると、そのような疑問が生じるのは UFO が一つしかないと考えるからでしかありません。たとえば、UFO が地球の全人口と同じ数、77 億機くらい存在していれば、当然、そのような疑問は意味を成さないことになります。連れて来られた人が乗っている UFO がたまたまその UFO だったのは、ただの偶然に過ぎません。「なんでよりによってこの私が UFO に拉致されたの？」という問いは、あらゆる地球人が同じように発する問いとなるのです。

もちろん、UFO は＜現＞に対応し、連れて来られた人は＜わたし＞に対応します。

上のように考えてみると、「あらゆる＜わたし＞は＜現＞であり得る」からくる矛盾についても、「仮にどのような＜わたし＞が＜現＞として「選択」されたとしても、それぞれの＜わたし＞ごとにそれぞれの＜現＞があるのだから、『なぜ＜現＞はこの＜わたし＞なのか』という疑問は、当然どの＜わたし＞でも同じように成り立つことになる。だから、そんなことは何も不思議なことではない、当たり前のことだ」、という解答が可能になります。

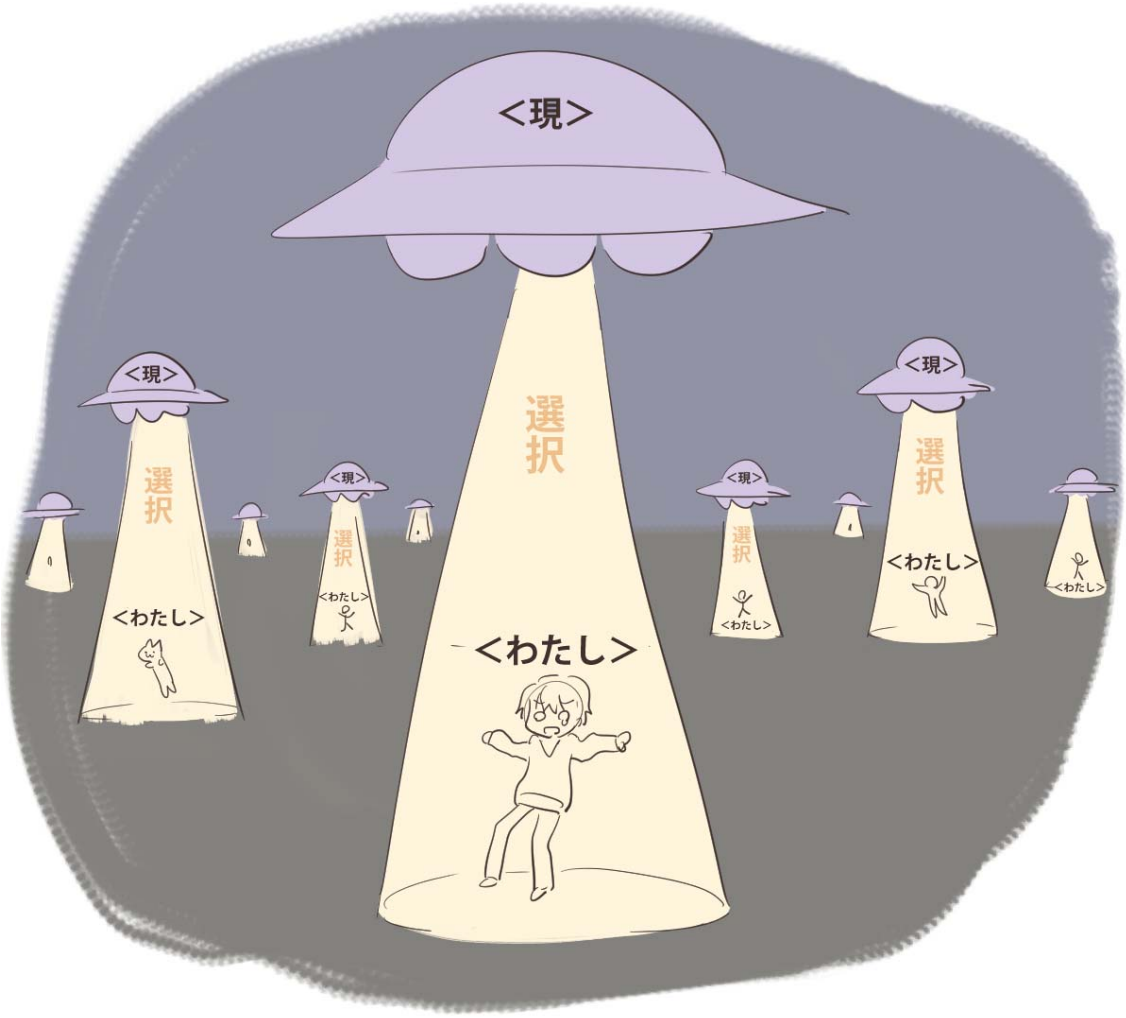


図　UFO に拉致される＜わたし＞

……これは一見納得できる説明のようにも思えます。

が、やはり**問題はなにも解決されていない**と思われます。

まず、＜現＞のアナロジーとして、UFO のような「客観的な」存在を考えるのは、やはり無理があります。事実、77 億機もある UFO と違って、＜現＞というスクリーンは世界中を見渡しても、「これ」しかないのです。そのような、UFO みたいな他のものに例えようのない唯一無二の「主観性」こそが、前提 1 を成り立たせているのです。

そしてなにより、UFO の例えではより本質的な問題を見落としています。

すなわち、「地球人のうち一人を UFO に**拉致する**」というメカニズムが存在する事、すなわち、「あらゆる＜わたし＞の中からある＜わたし＞が＜現＞として『**選択される**』」という、**謎メカニズム**が存在するという、この不思議です。

「何かが選択される」と「なにも選択されない」の間には、絶対的な断絶があるのです。

ここで、一旦＜すべて＞という視点に立ち戻ってみたいと思います。

＜すべて＞の内部には、それを内側から眺める＜わたし＞を成立させるパターンとして、＜世界＞というパターンが無数に存在するのでした。そのような諸＜わたし＞のひとつが、＜現わたし＞としてここに生じている、と考えられます。

しかし考えてみれば、ひとつの＜世界＞というパターンの中には、「この＜わたし＞」だけでなく、無数の意識が生じていると思われます。実際、私が見ている世界の中にも、意識を生じていると思われる無数の人や動物が生活しています。

にもかかわらず、その＜世界＞というパターン内のひとりの＜わたし＞が、＜現＞としてなぜか「**選択**」され、ここに生じているのです。先に UFO の例であげたように、これは実に不可解なことです。

いったい**＜世界＞というパターンのどこに、ある特定の＜わたし＞が＜現＞である、などという情報がコードされているのでしょうか？**

そしておそらくそれがわかれば、＜現＞がある＜わたし＞から別の＜わたし＞へと移りかわり続ける、ということの意味もわかるのではないかと思われます。

3.7 ＜わたし＞の原点性はどこにある？

＜すべて＞の内部には＜わたし＞を成立させるようなパターンが無数に成立するのでした。そのような＜わたし＞のうちの一つが＜現＞として、こうして文字をタイプしているこの私の目の前に今この瞬間にも「これ」として現象しています。

一方で、この＜わたし＞が眺めているこの＜世界＞の中には、たくさんの人や動物が生きていて、それぞれが＜わたし＞という意識を生じさせているはずです（もちろん本当かどうかの確認は不可能ですが）。にもかかわらず、＜現わたし＞としてここに現れているのは、不思議なことにこの＜わたし＞だけです。

このように、＜現わたし＞はあらゆる＜わたし＞の中でも特権性というか、**原点性**を持っていて、明らかに他の＜わたし＞とは異なっていることがわかります。

では、そのような＜現わたし＞の**原点性**は、＜すべて＞から抽出された＜世界＞というパターンの中の、**いったいどこに、どのようにコードされているのでしょうか？**　それともパターンの中にはそのような情報は含まれていないのでしょうか？

この問題を考えるために、＜すべて＞の全体を俯瞰して眺めることができる神のようなものを想定してみることにします。

そして神の視点に立って、ある＜世界＞を＜すべて＞の内部から抽出することを考えます。抽出されたその＜世界＞には人間のような知的生命体が繁栄しており、現象的意識も無数に成立しているとします。

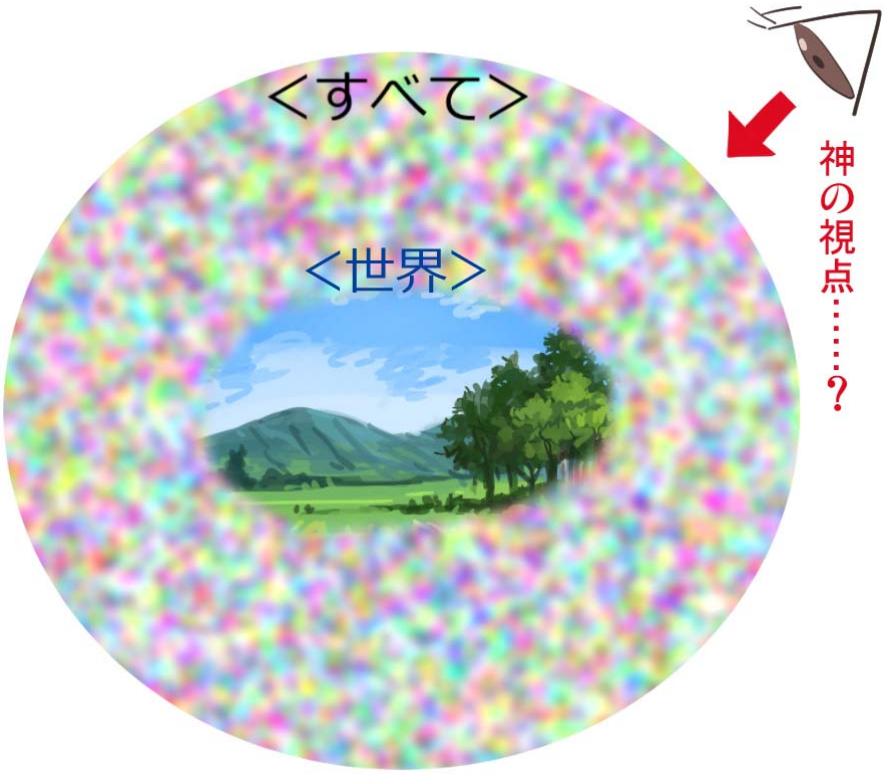


図　神の視点

さて、神が抽出したその＜世界＞というパターンの中に、＜現わたし＞は果たして含まれているのでしょうか？

……おそらく、そのパターンの中のどこをさがしても、＜現わたし＞はみつからないはずです。なぜなら＜現わたし＞は、そのパターンを眺めている神の視点、まさにそっちの方にあるからです。

ところで考えてみると、神の視点から＜世界＞を眺めようとしたところで、それはどのように眺めることになるのでしょうか。

例えば監視カメラのようなものでスクリーンに世界を映すような感じで眺める、ということを考えてみても、監視カメラは必ずその世界内のどこかに時空間的な位置を占めることになりますし、カメラが物質をとらえるためにはカメラの感光素子とかそういうものが光子と相互作用しなければなりません。相互作用しない物質はそもそも見ることも聞くこともできません。存在しないのと同じです。

そのように考えていくと、その＜世界＞を眺めようとするならば、＜わたし＞という観測者は必ずその＜世界＞内に位置を占め、またその＜世界＞と相互作用する、すなわちその**観測者自身が＜世界＞によって構成されていなければならない**ことがわかります。なにか神のような客観的な、俯瞰的な視点から、その視点自体を含まずに＜世界＞だけをパターンとしてとりだそうとすることは意味を成さない、ということです。

このことを当該の問いに対して当てはめてみると、実は「原点性は＜世界＞というパターンの中のどこにコードされているか？」という**問いの前提自体がナンセンス**だったことがわかります。この問いの中ではさらっと「＜世界＞というパターン」などと言っていますが、実はこれは＜わたし＞から独立した、客観的な神の視点から抽出されたパターンに他ならないからです。

＜世界＞はその内部にある＜わたし＞という原点からしか抽出できないのだと考えれば、＜世界＞というパターンの成立は、その内部のどこかを＜わたし＞という原点として置くことが大前提とされていることがわかります。

だから、「原点」はパターンの中にコードされているわけではなく、むしろ＜

世界＞というパターンそのものを成立させる前提だったのです。

この＜わたし＞がみているこの＜世界＞内にいる他者の意識が「ここ」には現れてこないのは、結局、「この＜世界＞というパターンがこの＜わたし＞という原点から眺められているものだから」と答えることができそうです（当たり前のことを言っているだけにも思えますが）。

2.9 節や 2.10 節でもすでに述べたように、＜世界＞は＜わたし＞という内側からの観測者の主観上においてしか意味をもちません。このことからもわかるように、どうやら、＜すべて＞の中からあるパターンを＜世界＞として抽出、すなわち**＜選択＞**しようとするならば、必ずそこには世界を眺める原点としての、＜現＞としての＜現わたし＞が必要となるようです。

それを認めるなら、「あらゆる＜わたし＞は＜現＞であり得る」は、「**あらゆる＜世界＞という＜選択＞パターンが可能である**」と言い換えることができそうです。

なぜなら＜世界＞を＜選択＞している時点で、すでにそこに「＜現＞としての＜わたし＞」を含んでいるからです[19]。

---

[19] ここで、＜わたし＞という意識によって粗視化を行わなければ、あらゆる存在物は胡散霧消してしまう、という第２章の議論を再び思い出していただけたらと思います。たとえば素粒子の配列パターンを＜すべて＞から抽出したからといって、それを粗視化して見る人がいなければそこに「リンゴ」は存在しません。その意味で、神の視点からのパターンの抽出、すなわち純粋に客観的な存在、というものは意味を成さない、ということです。

3.8 なぜ＜現＞はこの＜わたし＞なのか？（後編）

ここまでくると、だんだん謎の答えがみえてきたと思います。

＜すべて＞の中からあるパターンを＜世界＞として＜選択＞しようとするならば、必ずそこには世界を眺める原点としての、＜現＞としての＜現わたし＞が必要なのでした。

すなわち、「あらゆる＜わたし＞は＜現＞であり得る」は、「**＜わたし＞が成立するあらゆる＜世界＞という＜選択＞パターンが可能である**」と言い換えることができます。なぜならパターンを＜選択＞している時点で＜現＞を含むからです。

ここで、＜すべて＞はあらゆるすべてが不確定の状態であり、そこには**時間は流れていない**のでした。

だから、＜すべて＞の視点上で輪廻転生などということは、実は言えません。輪廻転生は「○○から□□に転生する」といったように、時間的な前後関係を前提としているからです。

そもそも、輪廻転生する主体なるものを考えたのも、「死んだ**後**はどうなるんだろうか？」という疑問が示すように、時間的に連続し続ける何かが必要だったからです。だから時間そのものが存在しない場合は、連続し続ける主体などというものを考える必要はありませんし、そもそも時間が存在しないのでそんなことは不可能です。

むしろ、＜すべて＞という視点から考えると、すべては可能性として同時に重なり合っているのです。だから、**「あらゆる＜世界＞という＜選択＞パターン」**もまた、**同時に、可能性として重なり合っている**、ということになるはずです。

これまで、「＜現＞は輪廻転生する主体のようなものではない」にも関わらず「あらゆる＜わたし＞は＜現＞であり得る」、というジレンマについて考えてきました。

すなわち、「あらゆる＜わたし＞は＜現＞であり得る」としたとき、いったい「何が」＜現＞としての同一性を担保しているんだ、という事を疑問としてきたわけです。

しかしここにきて、その解答が示されたと考えます。

すなわち、「**あらゆる＜わたし＞は＜現＞（になり得る可能性）として重なり合っていた**」のです[20]。別の言葉で言えば、**あらゆる＜わたし＞は実は＜すべて＞の上で同じ原点を共有していた**[21]のです。

ところで、Wikipedhia にて「なぜ私は私なのか」という項目を調べてみると、解答の候補が以下の図のようにまとめられているようです。

---

[20] そう考えると、3.3 節のスワンプマンの問題はすべてのケースで解決されると思います。答えは「**すべてのケースで＜現＞は連続する**」、です。なぜなら「あらゆる＜わたし＞は＜現＞であり得る」からです。

[21] これは一見するとかなり怪しげな主張なので、「なんと馬鹿げたことを。私の脳と他人の脳は空間的に別の場所にあるじゃないか。それが同じ原点を共有しているだって？　……ふざけている。バカも休み休みに言いな！！」というふうに思うかもしれませんが、そもそも空間というものが客観的実在かどうかということを考える必要があると思います。それは 2.6 節でもみたように、より根源的な物理から「創発」されて出てきたものです。そう考えると、＜すべて＞の視点の上では、空間も時間もなく、よってすべては一点に重なり合っている、とも言えると思います。空間や時間、というものは、あくまで＜わたし＞＝＜世界＞という内側からのみ成り立つのです。

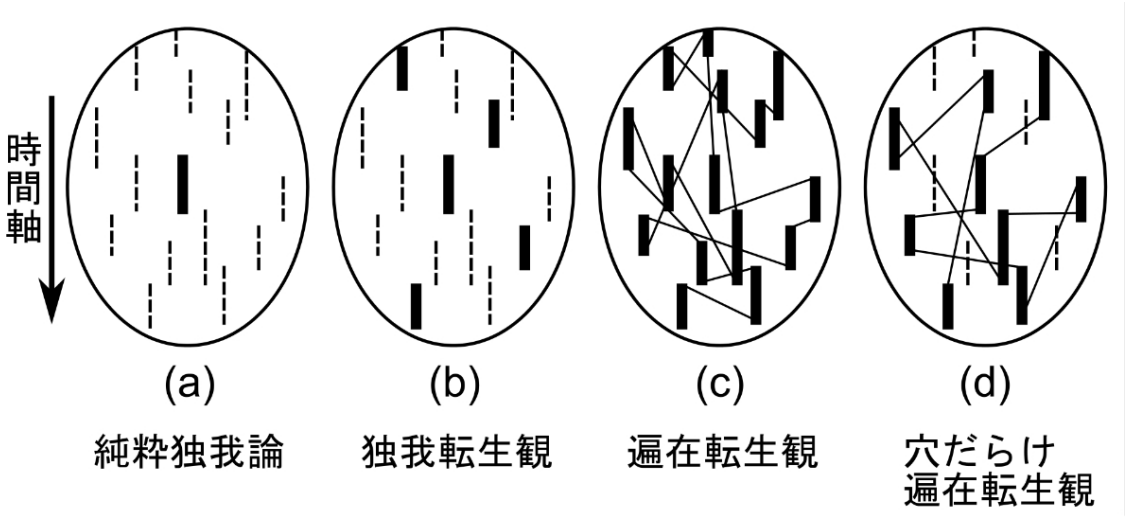


図　様々な主張の概念図（出典：渡辺恒夫『輪廻転生を考える』、Wikipedhia より引用）

これはわかりやすい図なので、せっかくなので上の図にならって、この節の帰結を以下のように図示したいと思います。

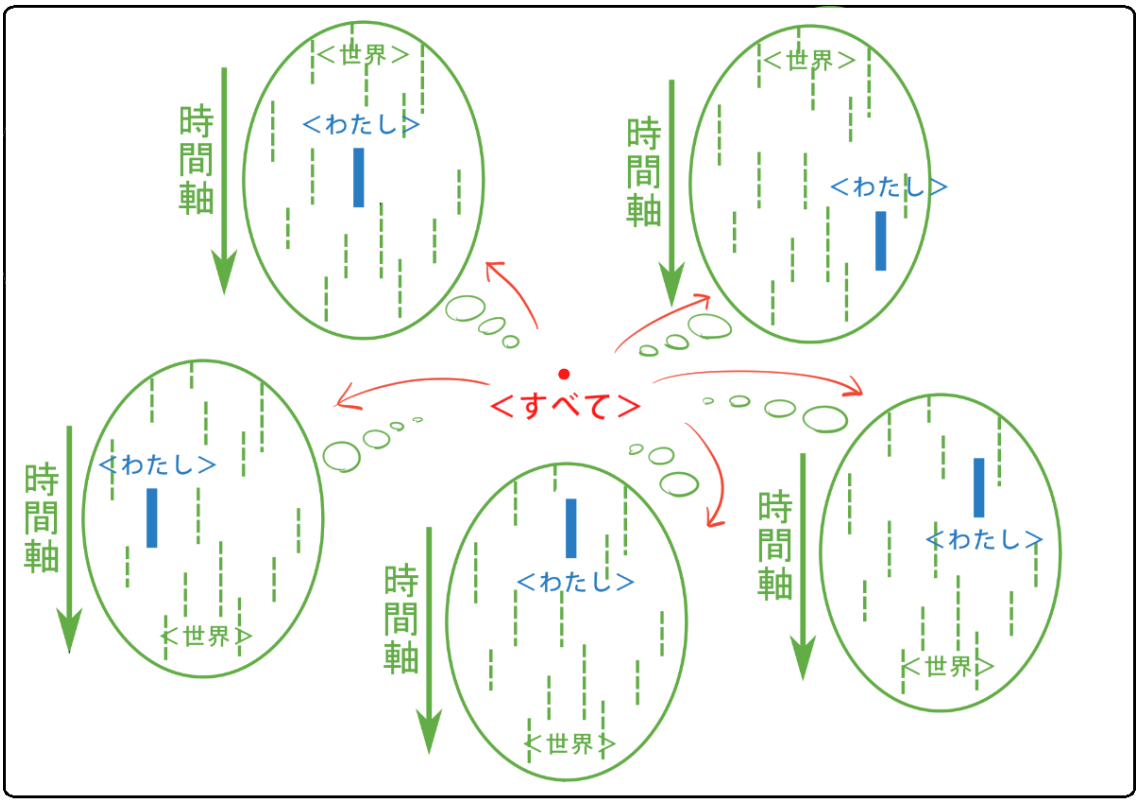


図　「あらゆる＜わたし＞は＜現＞として重なり合っている」概念図

3.9 死んだ後はどうなるのか？　――一応の答え？

ここであらためて立ち戻って、第３章の最初の問いについて再び考えてみたいと思います。

「死んだ後はどうなるのか？」

この問いをこれまで出てきた概念を使ってより正確に書きあらわすと、

「「私」が死んだ後は＜現＞としてなにが生じるのか？」

となります。
これに対する最も素朴で一般的な解答は、

「死んだ後は無になる」

であり、すなわち

「「私」が死んだ後は＜現＞として今後永遠に何も生じなくなる」

なのでした。

しかしこれは何を言っているのでしょうか？　先にみてきたように、あらゆる＜わたし＞は＜現＞であり得ます。だとするならば、＜現＞として今後永遠に何も生じなくなる、ということははたしてあり得るのでしょうか？

ここで、第３章の冒頭の議論を思い出して下さい。「死んだ後は無になる」という考えには、三つの誤った前提があるのでした。

ひとつめは、「無は時間的な存在とみなしていること」で、それは＜すべて＞という立場からすれば時間は流れていない、ということに対応します。

ふたつめは、「無を対象として扱っていること」で、これは＜わたし＞が成立しない＜すべて＞からの抽出パターンは＜現＞として観測され得ない、ということを意味します。

そして**みっつめ**は、「死んだ後に無を観測し続けるような、なにか連続する主体的なものが残り続けると暗黙裏に仮定していること」で、これは先にみてきたように＜現＞は連続しつづける主体的なものではない、ということを意味します。

ひとつずつみていきたいと思います。

まず**ひとつめ**です。

「死んだ後は永遠に＜現＞としてなにも生じなくなる」としてしまうと、「＜現＞としてなにも選択されていない永遠の期間」という期間が**＜すべて＞の立場から**存在することになってしまうため、＜すべて＞の立場では時間が流れていない、という前提に矛盾してしまいます。

よって、「**＜現＞は何らかのパターンとして常にある**」、としなければなりません[22]。永遠だろうがなんだろうが、**時間はその内側からのみ成り立つ**のです。

---

[22] なお「あるパターン」から「別のパターン」へと＜現＞が移り変わる、ということは一見すると時間的な前後関係を必要とするように思えますが、それは「あらゆるパターンが＜現＞として重なり合っている」かつ「＜わたし＞は重なりあって存在できない」から導き出せることなので、＜すべて＞の立場で時間的前後関係を想定する必要はないと考えられます。その場合の時間的前後関係とは、＜わたし＞という内側からみた時にのみ成り立つ、見かけ上のものに過ぎません。

ところで、3.6 節の UFO のたとえでは、「UFO に拉致する」、すなわち「なんらかの＜わたし＞が＜現＞として『**選択される**』」という謎のメカニズムが存在することの不思議を考えました。

しかし、以上のように考えるなら、「＜現＞は何らかのパターンとして常にある」のだから、「**＜現＞はなんらかの＜わたし＞として常に＜選択＞されている**」、というように考えなければならないことになります。

そしてこれは**「なぜ何もないのではなく何かがあるのか」**に対する説明でもあると思われます。

ここで、この問いにおける「何もない」は 2 通りの解釈ができると思います。ひとつは「空集合」に相当する「何もない」であり、もうひとつは、「存在論的にそれは存在しない」といったような意味での「なにもない」です。

両者をとりあえず区別するために、それぞれ「**何もない**」と「**なにもない**」と言う風に、漢字とひらがなで書き分けたいと思います。

さて、＜すべて＞は「なぜ？」という問いの対象外であり、それよりもメタな構造は「なにもない」のでした。よって、＜すべて＞の内部にとり得るなんらかのパターン**「だけがある」**、ということになります（この「だけ」の重さには背筋が凍り付きます）。

この見方からすると、「何もない」に相当する「空集合」は、＜すべて＞がとり得る数あるパターンのうちのひとつと見なせます（ただしそのようなパターンは＜わたし＞を含まないので当然＜現＞にはなり得ません）。

そしてそれ以外は、文字通り「なにもない」のです。よって、「なにもない」に相当するのは、すなわち**「なにも＜選択＞しない」**ということになります。そしてそれは文字通り、**存在できない**のです。

ということで、次に、**ふたつめ**です。

＜わたし＞が成立しない＜すべて＞からの抽出パターンは＜現＞として観測され得ない、一方で、上でみたように、「＜現＞は何らかのパターンとして常にある」。

この二つから言えるのは、「私」の死によってこの＜わたし＞というパターンが成立しなくなれば、当然そのような＜現＞は観測され得ず、**かわりに別の＜わたし＞が成立するパターンが＜現＞として＜選択＞される**、ということです。

そして第 2 章でみたように、＜わたし＞と＜世界＞は不可分なのでした。だから、この＜わたし＞の死によってこの＜世界＞は＜すべて＞という不確定の海に埋没して消滅します。しかし、上の話に従うなら、別の＜わたし＞と不可分な存在として、やはり別の＜世界＞が、＜わたし＞と共に＜現＞として現象される、ということになります。

そしてこれまでの議論を総合すると、**どうもそれこそが、この「私」の死後に起こることである**、と言えそうです。

以上より、「死んだ後はどうなるのか？」という疑問には、一応は答えることができたように思います。

……しかし、ここで疑問が湧いてきます。

考えてみると、「あらゆる＜わたし＞は＜現＞でありえる」のでした。そして、どのような＜わたし＞が＜現＞となったところで、＜わたし＞の連続性は記憶が担保しているため、＜現＞が移り変わったかどうかということは気づかれることはないのでした。

だとするならば、別に「私」の死後まで待たなくても、**＜現＞は一瞬一瞬別の＜わたし＞に切り替わり続けているし、その度毎に＜わたし＞＝＜世界＞もまた一瞬一瞬消滅し生成され続けている**、と考えても良いような気がしてきます（大乗仏教の刹那滅みたいな世界感ですが）。

ならば、特に「死んだ後」を特別視する意味はないように思われます。生きようが死のうが、いずれにせよ次の瞬間には＜現＞はどこかの＜わたし＞＝＜世界＞として生じるのですから。

しかし一方で、＜現＞はこの肉体的な「私」として連続的に生じ続けているようにみえる、というのも主観的な事実であります。
一瞬前の＜現＞は猫だった、というのは本当かもしれませんが[23]、あまり直観に反する結論に急がずに、「この」主観的事実を説明するような見方を考えなければならないと思います。

---

[23] 正確に言うなら＜すべて＞の立場では時間的前後関係が存在しないので、一瞬前の＜現＞は何だったか、と特定しようとすることは意味を成しません。ただあらゆる可能性が重なり合っているのです。

ここで、最後の**みっつめ**です。

＜現＞は連続しつづける主体的なものではないのでした。

しかしながら主観的には、肉体的なこの「私」として＜現＞が連続し続けるように明らかに感じられるのでした。

では、そのような「私」と＜現＞の関係はどうなっているのでしょうか？　両者はどのように関連づけられているのでしょうか？

さて、それを考えるためには、3.3 節あたりから＜現＞について考えていく中でずっとモヤモヤと引きずってきた問題に、そろそろけりをつけなければならないと思われます。

すなわち、還元すれば「単位クオリア」としてバラバラに生じているであろう＜現＞が、どのようにしてひとつの＜わたし＞へと統合されて現象しているのか。

＜現＞のこの＜わたし＞としての主観上の連続性はいったいどこからくるのか？

これをやはり明らかにする必要がありそうです。

なお、「連続性は記憶がみせる幻」は、実は完全な解答にはなり得ません。なぜならそれぞれの「単位クオリア」には記憶を参照するような高度なことはできないと思われるからです（というかそもそも「記憶」それ自体が単位クオリアの集まりによって構成されているように主観的には思われます）。よって、記憶が参照できるようになるのは、少なくとも単位クオリアが＜わたし＞として統合されてからのことです。

であるならば、それぞれの「単位クオリア」に張り付いている＜現＞は記憶によらない仕方で＜わたし＞として統合されなければならないことになります。それはどのように行われているのでしょうか？

しかしそれを考える前に、そもそも、<わたし>を成立させる要素である「クオリア」とはいったい何なのでしょうか？　どうやってそんなものが生じているのでしょうか？

それを次節以降で明らかにしていきたいと思います。

3.10 世界の創発とクオリア

前節では、「死んだ後はどうなるのか？」という本章の疑問に対して、一応の解答を与える事ができました。

しかし、その解答によるならば、生きようが死のうが、一瞬一瞬この＜世界＞は＜わたし＞と共に生成消滅し続けるため、特に違いはない、という仏教の刹那滅のような世界観になってしまったのでした。

しかし、そうは言っても「この」主観的意識は主観的に、時間的に連続して生じ続けているようにみえます。それはどうも記憶による担保だけでは説明がつきそうにありません。では、この連続性はどこから生じているのか、ということで、意識現象の構成要素であると考えられるクオリアという謎の現象について、本節ではみていきたいと思います。

さて、ところで 3.7 節でみたように、＜現＞、すなわち＜わたし＞の「原点性」については、＜世界＞というパターンの中には含まれていないのでした。

では、＜わたし＞という意識現象そのものについてはどうでしょうか？

少なくとも、＜わたし＞を生成している脳や神経細胞といったハードウェア的なものは、＜世界＞というパターンに含まれています。しかし、そこから現れるソフトウェアとしての**＜わたし＞という意識現象それ自体は、いったいどこにどう存在しているのでしょうか？**　どこかにパターンとしてコードされているのでしょうか？

ひとつの考えは、＜わたし＞という意識現象をコードしているようなパターンがそれ独自に存在している、という説です。つまり、いわゆる心身二元論です。

しかし、この考えが間違っていることはすぐにわかります。

もしそのようなパターンが存在するなら、そのような意識をコードしているようなパターンさえあれば、脳や神経、外部世界等々のパターンはいらない事になってしまうからです。

第２章の「無秩序の中の脳」と似たような状況ですが、この仮定においては最早脳さえ必要ありません。＜世界＞は完全に不要になってしまうのです。

また、もしそのようなパターンが存在するなら、見かけ上はまったく人と同じなのに「意識現象だけ」を生じていないような人間が存在できてしまうことになります。いわゆる「**哲学的ゾンビ**」です。

しかしもしそのようなものが存在するなら、脳だの神経だのの物理的構造は＜わたし＞という意識を成立させるための必然的要請ではなくなってしまうことになり、すなわちこの＜世界＞は＜わたし＞という意識を成立させるための必然的要請ではなくなってしまうことになります。

そして、やはり＜世界＞は成立しなくなってしまうでしょう。

以上より、意識をコードしているようなパターンがそれ独自に独立して存在していると考えると、うまくいかなそうです。それよりもむしろ、＜わたし＞という意識は脳や神経細胞などの＜世界＞を構成するパターンから、「**創発**」現象として必然的に生成されているものである、と考えなければならなそうです。

ここで、「創発」とは何だったか、ということをおさらいしたいと思います。

あらためて、「創発」とは以下のような事を言うのでした。

創発

あるパターンを「粗視化」して眺めたとき、元のパターンとは一見関係ないような新たなパターンがマクロレベルで現れ出ているようにみえる事。

第 2 章では、「リンゴ」とか「机」とか「物質」とかいうものは、それを眺める＜わたし＞という意識が「素粒子」とか「場」とか「ヒモの振動パターン」のようなより根源的なものを「粗視化」することで初めて成立する創発現象である、ということをみてきました。そしてそのような主観的意識が仮に存在しなければ、マクロレベルで現れる「時間の矢」とか「りんご」などというものは胡散霧消して存在できない、ということをみてきました。

意識現象はそのように、「粗視化」や「創発」を成立させる上で、決定的に重要であるということです。＜わたし＞と＜世界＞が不可分である、ということを考えてみても、なおさらです。

そう考えると、逆に考えて、むしろ意識現象とは、**「対象を粗視化して何かを創発させる」というまさにそのこと**ではないか、という仮説が、自然と浮かび上がると思います。

例えば、「赤い」という感覚質について考えてみます。

それは雑に見れば、「赤」に相応する波長域の電磁波を網膜の視細胞がとらえて電気信号に変換し、脳内の適切な径路を経て、最終的に脳のどこかのニューロンのスパイクによって「赤い」というクオリアとして現象されたもの、とい

う風に考えられると思います。

ここで、その一連の過程のどこかで脳内のニューロンが確実に行っていると考えられるのは、「赤の波長域に対応する電磁波」に相応する入力信号を、あるニューロン群の発火の組み合わせとしてパターン化、すなわち**「粗視化」**することです。入力信号の時点ではただの雑多な電磁波であったものを、「赤」という形で整理した、とも言えます。そうすると、少なくとも、「赤」というラベリング自体はその時点ですでに行われていることになります。であるならば、むしろそのラベリングとして、「赤」というクオリアがこの時点ですでにそこに生じている、と考えるのは自然な考えであるように思います。

もっと別の表現を使うなら、例えばランダムな砂嵐パターンが目の前にあることを想像してみてください。そしてふと、そのようなランダムなパターンの中に、なにやら人の顔のように見えるパターンがあることに気がついたとします。そうすると、そのパターンは最早ランダムな砂嵐ではなく、人の顔のパターンへと変化するはずです。

ここで、砂嵐をそのようなパターンとして認知し、「人の顔」とラベリングした時点で、そこに「人の顔」は浮かび上がっているはずです。であるならば、そのようなパターンとして入力信号を**粗視化**した時点で、そこに「人の顔」というクオリアが生じている、と考えるのは、わりと自然に思えるのではないでしょうか。

おそらくそのようなメカニズムがクオリアを生みだしているのだと考えて、ここで、クオリアの生成メカニズムとして以下の仮説を提案したいと思います。

クオリアの生成メカニズムに対する仮説：

クオリアとはある情報を粗視化して＜世界＞としてパターン化することそのものであり、またそれによって創発されたもの。

さて、以上のように仮説を立ててはみましたが、よく考えてみると、ここまでの議論では、＜わたし＞とか「クオリア」とかの概念をあまり意識して区別せずに用いてきたように思います。

しかし、それぞれの「単位クオリア」から＜わたし＞がどのように生じているか、ということがこの節の最初の問題意識だったのでした。だから両者をごっちゃにしていてはだめで、まず両者を分けて、その関係を明らかにしなければなりません。

ここで、「単位クオリア」とは意識現象の構成要素であり、これが情報的に統合されることで、＜わたし＞が生成されるのでした。

なのでとりあえず、「**クオリアは入力情報をあるパターンとして粗視化する際に生じる**」、というところからスタートして、そこからどのようにして＜わたし＞が生じるのか、ということを次節では考えていきたいと思います。

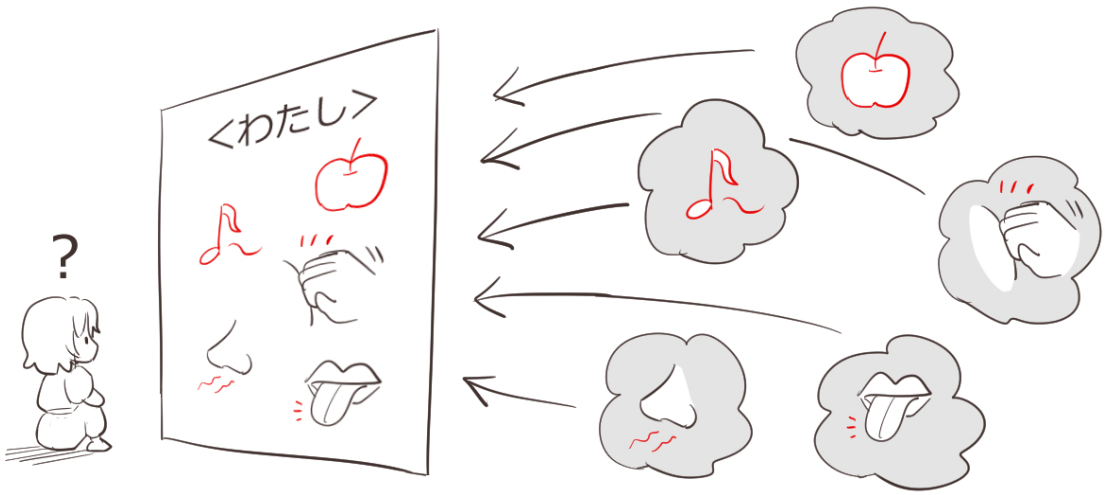
それが分かれば、本来単位クオリアにそれぞれ独立に張り付いているだけであると思われる＜現＞が＜わたし＞として統合され、あたかも時間的に連続し続ける主体であるかのように感じられることの意味も、みえてくると思われます。

3.11 クオリアから＜わたし＞へ

前節では、**クオリアは入力情報をパターンとして粗視化することで創発現象として生じている**、という仮説を導入しました。この説に従うなら、クオリアは脳内の至る所で生じていると考えられますし、人間や哺乳類などだけでなく、昆虫などの単純な神経系を持った生物や、画像認識するＡＩにさえも生じていることになります。

しかし、それらのクオリアはそれぞれ独立に生じているに過ぎず、＜わたし＞という統合された知覚体験としては感じられないはずです（もし脳内に生じているクオリアをすべて＜わたし＞として感じられるなら、私の意識は相当なカオス状態になっているはずです）。

では、それらの諸クオリアは、どのように＜わたし＞という主観的意識へと統合されているのでしょうか。別の言葉で言うなら、**「何が」それらの諸クオリアを眺め続けているのでしょうか**。これはもう脳科学とか神経科学の知見になると思うので、私の雑な知識から何か述べようとするのはどうかしているとも思いますが、そもそもこの文章全体の主張自体がどうかしている面もあると思うので、あまり気にせずに私の理解の範囲内で自説について考えてみたいと思います。



とりあえず考える対象として、視覚情報の径路を例にあげて考えてみたいと思います。

「リンゴ」という視覚情報が網膜に入ってから＜わたし＞として意識体験されるまでの径路を簡略して書くと、だいたい以下のようになると思われます。

リンゴ　→　電磁波　→　網膜の視細胞　→（中略）→
→　Ｖ１（一次視覚野）　→　V2（二次視覚野）　→　V3（三次視覚野）
→　Ｖ４（四次視覚野）　→　IT（下側頭葉皮質）　→（中略）→
→　意識体験[24]

それらの部位でそれぞれ何をやっているかとみてみると、たとえば Ｖ１では「線分」のような形で入力信号をパターン化しているようですし、さらにＶ２などの高次領域では「輪郭線」とか、IT ではさらに「リンゴというパターン」というように、先に進むほどより抽象的なパターン化がなされているようです。

さて、これを粗視化という観点からみてみると、高次領域に進むほど、粗視化という操作が**入れ子状に**積み重なっている、ととらえることができます。それはすなわち先に進むにつれてどんどん入力信号の解像度が粗くなっていっている、ということですが、これは例えば、高次領域に進むほど入力信号に対する応答特性が雑になる、いわゆる「般化」と呼ばれる変化が起こることからも理解できそうです。

---

[24] なお、＜わたし＞という意識が脳内の局所的な部位で生じているのか、あるいは大域的なネットワークとして生じているのか、仮にどちらであったとしてもここでの議論の本質には特に影響はしませんが、色々な知見を踏まえると、おそらく大域的なネットワークとして＜わたし＞という意識が生じているのではないかと思います。

ここで、「クオリアは入力情報を粗視化することで創発現象として生じる」という当説によるならば、高次領域に進むほど「クオリアのクオリアのクオリア……」というように、**クオリアが入れ子状に連なっている**、とも言えると思います。たとえば、「リンゴの輪郭」というクオリアは、「線分」を表す諸クオリアがたくさん集まり、それを粗視化することで生成されたクオリアである、というような感じです。

そうすると、「クオリアのクオリアのクオリアのクオリアの……」とクオリアが積み重なって行く事になり、最終的に、それらの諸クオリアは**「諸クオリアのクオリア」**として、脳内のどこかで[25]一つの巨大なクオリアを生成することになるのではないか、と自然に考えられると思います。

そしてそのようにして生じているものこそが、＜わたし＞という意識に他ならないと考えます。

以上が、当説による「クオリア」が統合されて＜わたし＞が生じるメカニズムの説明です。諸クオリアを眺め続けているもの、それは**＜わたし＞というクオリアに他ならなかった**、ということです。

---

25 入れ子構造が生じていることを考えるなら、どこか局所的な部位で＜わたし＞が生じているとするよりも、むしろ大域的なネットワークとして「巨大な粗視化」が生じているとした方が話の流れ的にも良いと思われます。そう考えるなら、意識を生じさせる神経細胞のネットワークは入れ子的な構造をもつことになりますが、そのような構造を持つことで、そのネットワークは構成要素それぞれの状態の組み合わせとして、すなわち**べき集合**としてあらたに集合を形成して情報を表現することができ、「統合された全体」として表現できる情報は**単純な個の集まりよりもはるかに豊かになる**と思われます。そしてこれは「統合情報理論」でいうところの統合情報量を高めるような構造に対応するのではないかと考えられます。

図　クオリアの入れ子構造イメージ

……この考え方がはたして正しいかどうか実験的に検証[26]する術を私は持たないので、ここではとりあえずこの考えの良い点を考えてみたいと思います。

ここで、意識が生みだされるメカニズムについては色々な仮説があると思いますが、意識の生成を脳内のなんらかの物理的な過程に還元しようとする限り、基本的には

i. 「クオリア」と「意識される」は別物である。クオリアは脳内の情報処理の過程（もしくはその外）のどこかの段階でそれぞれ生じており、それらのうちあるものが選択されて意識に上っている[27]。
ii. 「クオリア」と「意識される」は不可分である。意識とクオリアは脳内の情報がどこかで統合されたその時に同時に発生している[28]。

という 2 パターンになるのではないでしょうか。

ただ、前者においては「クオリアが生成される」というメカニズムと「クオリアが意識される」というメカニズムの二つのメカニズムが必要になることになり、そうするといわゆる「カルテジアン劇場の小人」のようなものが湧いて出てくる気がします。

また、後者においては、仮に意識を生じさせるような脳の局所的な部位がど

---

26 例えばあるクオリアをコードしているニューロン群と情報的に等価なことを行う人工ニューロン群のようなものを作成して、その入出力を＜わたし＞という意識を生みだしていると思われる神経細胞のネットワークに組み込むことで、＜わたし＞の主観上にそのクオリアが混じり込むかどうかを確認する、という方法を使えば検証が可能だとは思います。

27 例えば表象理論のようなものがこれに該当すると思われます。

28 例えばグローバル・ワークスペース理論のようなものがこれに該当すると思います。

こかにあるとすれば、そこには脳内の他の部位にはない謎の特殊メカニズムが備わっていると考えなければならず、そのようなメカニズムの説明にかなり無理を抱えている気がしますし、逆に局所的な部位などではなく脳の全体として情報が統合されている、などとするならば、今度は何をもって意識が生じるに足る統合とみなすのか、という部分が恣意的になってしまい、では動物には意識は生じないのか、などという問題が生じ、やはり説明が難しくなるように思います[29]。

しかし、クオリアが入れ子状に連なっている、という私の仮説では、両者の問題はすんなり解決されます。

まずｉ.についてですが、当仮説では**「クオリアが生成される」メカニズムと「それが意識される」メカニズムを分けて考える必要がありません**。クオリアは下部構造から最終的な＜わたし＞という意識に上るまで、ただ入れ子状に連なっているだけであり、最後に意識に上る際に起こっていることは脳内の情報処理の素過程でそれぞれ起こっている事と基本的に違いがありません。

「ある感覚刺激が意識に上るまでには 0.5 秒以上の神経発火が必要」という有名な実験的事実がありますが、そのようにしてフィルターを突破したクオリアだけが、最終的に＜わたし＞というクオリアとして統合され、それ以外のクオリアは脳内のそれぞれの箇所で独立して生じたままで終わるので意識には上

[29]なおあらゆる統合の段階でそれ相応の意識が生じる、とするならば、それはだいたい私の考えと言ってる事は同じだと思われます。例えば統合情報理論では情報の統合度合いによって意識のレベルが変わってくるとしています。ただし、ではなぜ情報が統合されると意識やクオリアが生じるか、ということについては、そのような理論では理解できないように思われます。そしてその背景にあるメカニズムは、この仮説でだいたい説明できると思われます。

らない、ということです[30]。

また同様に、ii.についても、この考え方では**意識やクオリアを生みだすために何か特殊な脳の構造を考える必要がありません**。意識やクオリアを生成するメカニズムはあらゆる領域で一貫していて、やっていることはただそれを入れ子的に積み重ねるだけなのです。

また、局所的な部位ではなく脳の広域的なネットワークとして情報が統合されて意識が生じるとした場合も、あらゆる統合の段階で入れ子的にクオリアが生じていると考えるので、「何をもって意識が生じるに足る統合とみなすのか」という部分で生じる恣意性も排除することができ、「ヒト以外の動物にも意識は存在する」、と自然に主張することができます。

以上のように、この考えではｉ.とii.の両者の主張を両立させて解釈することができると考えます。

また、意識の機能面というか進化上の役割的な方面から考えてみても、それなりの説明ができそうです[31]。

---

30 この考えに従うなら、いわゆる「無意識」というものは＜わたし＞という最終的なクオリアには統合されずに脳内で独立に生じている意識である、ともみなせることになります。そう考えると無意識の人権という倫理的な問題が生じそうですが、そういった単発的なクオリアが仮に＜現＞になったとしても、後述するように時間的広がりを持たないと思われるので＜世界＞は一瞬で生成消滅して何の自覚もなく終わる気がします。

31 ただ、クオリアや意識というものの機能的な意味を考えることはあまり意味がなくて、むしろ「人間原理的要請として、『必然的に』たまたまクオリアの発生メカニズムとそれを生みだす様な神経細胞網の機能的特性が一致していた」というくらいに考えるべきだと思っています。

諸説あるとは思いますが、おそらく意識とは「外界の雑多な情報から生存に必要な情報だけを取捨選択してわかりやすく提示する」という機能的な意味が、ひとつとしてあるのではないかと考えています[32]。

そう考えると、「ひたすら情報を絞って多層的に粗視化しまくる」[33]という意識のあり方は、機能面からみても、とても合理的なのではないかと思われます。

また、意識として生じたものは短期記憶に保存される、という考えがあるようですが、これも、粗視化という形で情報を軽くすることで、保存に適した形で情報をまとめることができるとも解釈できる気がします。

さて、ここで話は戻りますが、3.4 節で話題にしたヴィパッサナー瞑想において主観的に経験される意識体験についても、ここにきてひとつの説明ができるのではないかと思います。

ここで、話をわかりやすくするために、入れ子状に連なっている諸クオリアを「１次クオリア」、「２次クオリア」、「３次クオリア」、……と呼ぶことにします。そして、最終的に＜わたし＞として生じるクオリアを「N 次クオリア」とすることにします。

そうすると、「N－１次クオリア」に対応するクオリアは、3.4 節で定義した「単位クオリア」に相当するものと理解できそうです。

ここで、考えてみると、＜わたし＞は「N 次クオリア」という枠内で生じて

---

[32] 特に明確な根拠はありませんが、そういう機能面での便利さがあることについてはほとんどの人は同意するのではないかと思っています。

[33] 例えば生まれつき盲目だった人が手術などで視力を回復した際、モノの形や輪郭線がわからない、ただ明るい光しか感じられない、という話がありますが、これは階層的な粗視化がうまく行われずに、「明るいか暗いか」というような、プリミティブでシンプルな粗視化によるクオリアが意識に流れている状態だと解釈できると思います。

いるので、「N－１次クオリア」それ自体は、＜わたし＞からは直接はみることができないと考えられます。＜わたし＞がみているのはそれらを粗視化して統合したパターンだけです。だからたとえば、＜わたし＞の意識に上っている「赤い」というクオリアよりも、「N－１次クオリア」段階の「赤い」の方が、よりクリアで鮮明なのだと考えられます。

しかし、瞑想において限りなく集中して意識対象に近づいていくと、「対象と同化する」というような体験があると言われるように、「N 次クオリア」という枠内から「N－１次クオリア」（あるいはより低次なクオリア）にフォーカスしていくことで、そこに限りなく近づいていくことは可能なのではないかと思われます。なぜなら意識対象に部分的にフォーカスしていくということは、すなわち**粗視化を解除する**ことに他ならないからです[34]。そう考えると、ある意識対象に集中するとそれがより鮮明になっていく、という瞑想的な体験も理解できます。

そしてそう考えると、ヴィパッサナー瞑想がやっていることは、**「N 次クオリア」を「N－１次クオリアに」バラバラに分解することではないか**、という解釈ができるのではないかと思います。

ただし、それはあくまで「N 次クオリア」の枠内でやっていることなので、どれだけバラバラにしたとしても、「N 次クオリア」的なものは背景に残り続けます。だから、それぞれの「単位クオリア」を眺め続ける主体的なものがどこまでいっても背景に残り続けることになり、それによって、それぞれの単位ク

---

[34] これはいわゆる「アクセス意識」に対する説明にもなると思います。アクセス意識とは、たとえば視界の中に現れているある対象について注目して「コップ」と意味づけするようなことを指しますが、それはある対象について、ぼんやりと漠然と意識全体として眺めた状態の粗視化を解除するとともに、言葉や意味といったクオリアの入れ子を新たに組み込んでいき、粗視化の階層構造を変化させるようなことをやっているのだと思われます。

オリアはバラバラではなく一つの＜わたし＞として統合されるのです。

そしてそれこそが、**＜現＞の主観的な連続性に対応している**のではないかと考えます。

ヴィパッサナー瞑想の知見に従うなら、＜わたし＞を構成する単位クオリアは一度に一つずつしか生じることができず、それらが高速で生成消滅し続けることで＜わたし＞の連続性は成り立っている、ということでした。であるならば、＜わたし＞とは諸クオリアを**時間軸方向に粗視化した**結果生じるクオリアである、という仮説が考えられます[35]。

そのようにして、時間的に異なる様々な「N－1 次クオリア」が「N 次クオリア」として統合されることで＜わたし＞が生じていると考えると、＜わたし＞は時間的な広がりを持ったものとして連続して現れ続けているという、主観的な事実にも合致します。

そうすると、それは＜わたし＞を眺めている[36]＜現＞の時間的広がり、すなわち連続性にもそのまま対応すると考えられると思います。＜現＞は時間的に広がりをもつ＜わたし＞というクオリアとして生じることで、時間的に連続し続けるものであるように振る舞うことができている、ということです。

以上が、前節からわたって考えてきた「**＜わたし＞と＜現＞の関係**」の解答であり、3.3 節あたりから考えてきた「**＜現＞の主観上の連続性**」の説明である、と考えます。

---

[35] たとえば「机の上にコップのある風景」と「エアコンの風の音」と「皮膚のかゆみ」と「寝起きのけだるい気分」とを混ぜ合わせて時間軸方向にモザイクをかけることを想像してみてください。何となく人間の意識っぽくなる気がしないでしょうか……（？）

[36] 一応注釈ですが「眺めている」はあくまで比喩的な表現です。

3.12 「私」と＜現＞

前節では「クオリア」と＜わたし＞のつながりについて考えました。

そして本来単位クオリアにそれぞれ張り付いているであろう＜現＞が、なぜ＜わたし＞といった時間的連続体として統合されているかのように振る舞っているのか、ということを考察しました。

その結果、時間的連続体としての＜わたし＞が＜現＞としてとらえられるメカニズムについて、ひとつの視点を得る事ができました。時間的連続体としての＜わたし＞は、諸クオリアを時間軸方向に粗視化した結果として生じている、というのがその解答です。

では、それを前提として踏まえて、これより 3.9 節から考えてきた問いに答えを出していきたいと思います。

「一秒前の＜わたし＞」や「1 週間後の＜わたし＞」、「１０年前の＜わたし＞」、「産まれた瞬間の＜わたし＞」、「死ぬ瞬間の＜わたし＞」、それらを連続体としてとらえた、**生まれてから死ぬまでの一つの人生を送る主体である、この「私」。**その＜現＞としての連続性は、いったいどのようにして担保されているのでしょうか？

ひとつの考えは、3.5 節でみたように、「私」という人格的主体の＜現＞としての連続性は、単に記憶が作りだした錯覚である、ということです。

単位クオリアのような構成要素とは違って、＜わたし＞というレベルではおそらく記憶の参照が可能だと思われるため、このような見方でもおそらく十分説明はつきます。

しかし、そうは言ってもやはり、＜現＞はずっとこの「私」として、時間的に連続し続けているように主観的には感じられるのです。だからそのような主観的な事実を説明するために、「私」と＜現＞の関係性について明らかにしよう、ということが 3.9 節からやってきたことなのでした。

なので、せっかくなのでもうすこし考えて、「私」と＜現＞の関係性を担保する何かが（若干こじつけでもいいので）考えられないかどうかをみていきたいと思います。

ここで、＜わたし＞と＜現＞の関係をあらためて見てみます。

＜わたし＞は還元すれば「単位クオリア」が入れ子状に積み重なって、「N 次クオリア」として情報的に統合されたものなのでした。

そう考えてみると、それをさらに拡張して、「N 次クオリア」をさらに「N+１次クオリア」というように高次のクオリアとしていってもおかしくはないことになります。すなわち、＜わたし＞を単位として諸＜わたし＞を統合した、さらに高次のクオリアというものを考えても、おかしくはないように思います。

では、それはどのようなクオリアでしょうか？

それはおそらく諸＜わたし＞を俯瞰した視点から漠然と眺めたようなものになると考えられます。すなわち、「私」の人生の諸経験を俯瞰して、漠然と眺めたようなものになるはずです。

であるならば、それはまさに「私」というひとつの人格的主体をあらわしていると考えられるのではないでしょうか。

実際、「「私」の人生とは？」と考えたとき、思い浮かぶのは諸＜わたし＞としての諸経験を何か漠然とひとまとまりにしたようなものであると思います。

そう考えるなら、「私」という人格的主体を思い切ってそのままひとつのクオリアとしてとらえてしまって、そこに＜現＞が張り付いている、と、（だいぶムリヤリですが）考える事もまた、不可能ではないように思えます。

一見無茶な拡張に思われるかもしれませんが、生まれてから死ぬまではずっと＜現＞はこの「私」として生じ続ける、という見方は主観的事実に合致していますし、それ自体はある意味問答無用で正しいのです。

それは記憶が作りだした錯覚に過ぎないのかもしれませんが、少なくとも見かけ上は、＜現＞は「私」として連続し続けているように思えます。だから同様に、少なくとも見かけ上は、＜現＞は「私」というクオリアに張り付いている、ととらえてしまうことも、アリなのではないかと思います[37]。

いえ、実際それはたぶん、ほとんど「そう見なしている」というだけなのだと思います。

しかし、考えてみれば、自然法則やこの＜世界＞というもの自体が、＜すべて＞をある見方から眺めたひとつの「見なし」に過ぎないのでした。

だから、「見なし」というものこそがあらゆるすべての本質なのではないかとも思います。

……と、（若干こじつけ感はありますが）以上より、＜現＞の「私」としての連続性をとりあえずは説明できたと思います。

---

[37] ただ、「私」の人生の上で生じた諸＜わたし＞を「私」という一つの粗視化として統合するためには、やはり記憶の参照が必要なので、結局は「記憶が生みだした錯覚」ということになるのだとは思います。というかそもそも、よく考えてみたらその「錯覚」というもの自体、「＜すべて＞からあるパターンを（みかけ上）抽出する」と同レベルのことを言っている気もします。

これで解答を与える道具が出そろいました。

次節にて、第３章で考えてきた疑問の最終的な解答を示したいと思います。

3.13 「死んだ後はどうなるか？」に対する解答

第 2 章より、＜わたし＞と＜世界＞は一蓮托生の存在であり、＜わたし＞の死によって＜世界＞は＜すべて＞という一切が不確定の海へと埋没し、消滅するのでした。

また、3.8 節より、「あらゆる＜わたし＞は＜現＞として重なり合って」おり、それによって 3.9 節でみたように、「この＜わたし＞＝＜世界＞が消滅した後は、別の＜わたし＞＝＜世界＞が、やはり＜現＞として生じる」のでした。

そして、3.12 節までの議論より、この「私」という時間的連続体の上に現象し続ける諸＜わたし＞は、「私」をひとつの粗視化とみなすことで、＜現＞として連続して生じ続けるものとみなすことができるのでした。

以上をまとめて、「死んだ後はどうなるのか？」に対する私の最終的な解答は、以下となります。

「私」が死んだ後はこの＜わたし＞＝＜世界＞は消滅する。
そして＜現＞として、
やはりなんらかの＜わたし＞＝＜世界＞が現象される

3.14 死後の世界のトリレンマの解決

解答が示されたこともあり、死後の世界のトリレンマについても整理しておこうと思います。

あらためてトリレンマをまとめると、

死後の世界のトリレンマ

- ✓ A：**＜現＞＝肉体的な「私」説**：
  ……「私」が死んだ後の＜現＞などない。無。
- ✓ B：**＜現＞＝＜現わたし＞説**：
  ……在るのは「今この瞬間」だけ。一秒後の＜現＞などない。無。
- ✓ C：**＜現＞は独立した主体説**：
  ……＜現＞は輪廻転生する。

なのでした。

こうしてみてみると、A、B、Cはそれぞれ正しいわけではありませんが、間違いでもないことがわかります。

Aの見方については、「私」を時間的に連続し続ける一つの粗視化と捉えるならば、正しいことになります。ただし、「私」が死んだ後は別の「私」が＜現＞として現象すると考えられるため、「私」が死んだ後の＜現＞もあります。

Bについては、＜現わたし＞に張り付いているものとして＜現＞をとらえるなら、正しいことになります。ただし、「あらゆる＜わたし＞は＜現＞でありえる」ので、一瞬後には別の＜わたし＞が＜現＞となる、と考えられます。

Ｃについては、＜現＞は独立した主体ではありませんが、「あらゆる＜わたし＞は＜現＞であり得る」、という意味で解釈すれば、正しいことになります。

以上より、トリレンマを俯瞰して説明する視点が得られたと考えられるため、死後の世界のトリレンマは解決された、と考えます。

第３章まとめ

第３章の話をまとめると、

- 「死んだ後はどうなるのか？」という疑問は、＜現わたし＞を体験する仮想的主体として＜現＞なるものを考えると、「死んだ後は＜現＞に何が生じるのか？」という風に言い換えられる。
- ＜現＞を何と同一視するかによって、Ａ：＜現＞は肉体的な「私」の死によって消滅するという説、Ｂ：＜現＞は「今この瞬間」しか存在しないとする説、そしてＣ：＜現＞は死後も存続し続けて輪廻転生する、という、「死後の世界のトリレンマ」に行き着く。
- 思考実験や仏教が主張する観測事実より、どうも＜現＞は「単位クオリア」に分解することができ、また時間的に連続し続ける主体のようなものではない。しかし一方で、そう考えなければ主観的に生じている「これ」の連続性を説明できない。
- このジレンマを解消するひとつの見方は、「＜現＞の連続性は記憶が作りだした錯覚」とするものであるが、そう考えるとそもそも「なぜ＜現＞はこの＜わたし＞なのか？」という疑問が湧いてくる。
- その疑問に対してコペルニクスの原理に従って答えようとすると、「あらゆる＜わたし＞は＜現＞であり得る」が導かれてしまい、＜現＞が輪廻転生することになってしまう。
- ここで、＜すべて＞から抽出した＜世界＞というパターン内のどこに＜現＞なるものの情報がコードされているのかと考えると、それはパターンのどこかにコードされているのではなく、むしろパターンを抽出する前提であることが推定される。すなわち、なんらかの＜世界＞というパターンを抽出した時点で、そこには必然的に＜現＞が含まれる。

- さらにここで、＜すべて＞にはあらゆる＜世界＞というパターンが同時に重なり合っている。よって、あらゆる＜世界＞を眺める＜現＞もまた、同時に重なり合っていると考えられる。
- 以上より、「あらゆる＜わたし＞は＜現＞として重なり合っている」が導き出される。これにより、輪廻転生を考えることなくコペルニクスの原理に従って「なぜ＜現＞はこの＜わたし＞なのか？」を自然に説明できる。
- しかしそれが正しいとすると、＜世界＞が一瞬毎に生成消滅を繰り返す刹那滅のような世界観が正しいことになるが、それはこの「私」が時間的に連続し続けるという主観的事実と合わない。よって、＜現＞の「私」としての時間的連続性を説明するために、まず「単位クオリア」からどのように時間的連続体としての＜わたし＞が生じるのかをみていく必要がある。
- クオリアとは粗視化によって世界を創発させることそのものである、という仮説より、＜わたし＞とは諸クオリアが入れ子状に積み重なって成立するクオリアである、という結論が導き出される。また＜現＞はクオリア一般に張り付いていると考えられるため、時間的連続体である＜わたし＞に張り付いている＜現＞もまた、時間的連続性を持つことになる。
- 上記の延長で考えると、「私」もまた時間的連続体としてのひとつの粗視化であると捉えることができ、＜現＞が「私」に張り付いている、と捉えることで「私」の人生を通した＜現＞の連続性を説明できる。
- 以上より、この「私」が生きている間はこの「私」として＜現＞は連続するが、この「私」が死ぬことで、この＜わたし＞と＜世界＞の組は消滅し、また新たなる＜わたし＞と＜世界＞の組として＜現＞が現象する、と結論づけられる。

以上が、この作品世界の住人たちがたどり着いた死後の世界に対する仮説です。

コラム３－１　哲学的ゾンビはなぜ不可能か

3.10～3.11 節では、入力情報を何らかの仕方で粗視化した際に、クオリアや意識が生じる、という仮説を導入しました。

ここで、哲学的ゾンビというものについて再度考えてみます。

哲学的ゾンビとは、脳や身体の物理的な構造は他の人となんの違いもないにも関わらず、ただクオリアや意識「だけ」が生じていないような仮想上の存在なのでした。

そのような存在は、「クオリアを生みだすようなある神経細胞網の発火」と「そこからクオリアが生じること」との間にある**因果関係**を否定することによって成立すると考えられます。

では、「因果関係」とは、そもそも何だったでしょうか？

第２章でみたように、物理的な因果関係とは、＜すべて＞をある特定の見方から眺めることによって**見かけ上**生じるものに過ぎない、ということでした。

たとえば、ある初期条件（位置、時刻、速度、等々）を与えられた粒子が、運動方程式に従って空間上を時間軸方向に運動するとします。このとき、我々は粒子の初期条件と粒子の運動との間に因果関係を見いだします。

しかし、＜すべて＞という視点からみたら、それは単に運動方程式に従うようなパターンを＜すべて＞から切り取って眺めた、見かけ上のものに過ぎません。粒子が運動方程式に従わずにデタラメに運動するようなパターンは、いくらでも想定できるのです。

このように、「因果関係」は（＜すべて＞の立場では）必ずしも必然ではなく、それが成立していないような状況をいくらでも想定することができるようなも

のだと考えられます。

　では、クオリアの発生についてはどうでしょうか？
　入力情報を粗視化した際にクオリアが生じる、という仮説に従うなら、クオリアの生成機序は以下の様にまとめられます。

「入力情報を粗視化するような神経細胞網の発火パターン」
→（関係１）→「入力情報の粗視化」
→（関係２）→「クオリアの生成」

　関係１と２についてみていきます。
　まず（関係２）についてですが、ある情報を粗視化することそれ自体がクオリアであるとするならば、（関係２）は「イコール（＝）」となり、同じ事を言っていることになります。よってこの関係を切断することはできません。

　では（関係１）はどうかというと、「入力情報を粗視化するような神経細胞網の発火パターン」が「入力情報を粗視化」するのだから、これは論理的に当たり前のことであり、やはり関係を切断することはできないことになります。

　すなわち、「入力情報を粗視化するような神経細胞網の発火パターン」から「クオリアが生成」されることは、**論理的な必然**であって、その間にある関係は**因果関係とは異なっている**、ということがわかると思います。

　しかしでは、なぜ粒子の運動は因果関係に従い、クオリアの発生は論理的必然となるのでしょうか？

この違いはどこからくるのでしょうか？

結論を言うと、この違いはクオリアが**パターンの「粗視化」によって生じており**、よって**パターンそのものには還元できない**、という所からきています。

例えば、薬品Ａと薬品Ｂを混ぜ合わせると、気体Ｃが発生する、というようなことを考えてみます。

このとき、「この世界の」物理法則に従うならば、ＡとＢを混ぜ合わせたらＣが発生する、ということは物理的な因果関係として必然ですが、＜すべて＞という視点からみたら、気体Ｃではなく気体Ｄが発生したり、何も発生しなかったり、核爆発が起こったり、地球が消滅したり、……等々といったパターンもいくらでも想定できます。

一方で、「入力情報を粗視化させるような神経細胞網の発火パターン」から「クオリアが発生する」、という関係について同じように考えてみると、＜すべて＞の内部をいくら探してみても、「クオリアが発生しない」というパターンはどこにも見当たらないことがわかります。

これはなぜかというと、クオリアは「パターンをある粗視化によって眺める」ことで生じるので、**クオリア自体をパターンに還元することはできない**からです。

これは例えばパソコンのディスプレイに例えられます。

パソコンのディスプレイには各ピクセルにそれぞれ色が割り当てられていて、ディスプレイから 1mm の近距離からそれを眺めてもなにがなにやらわかりませんが、それを遠くから眺める事によって、そこになんらかの画像が表示されていることがわかります。これがいわゆる、「粗視化」です。

ここで、各ピクセルに割り当てられているパターンが同じであれば、そして粗視化のやり方が同じであれば、それを遠くから眺めたときに浮かび上がるはずの画像が場合によって浮かび上がったり浮かび上がらなかったりすることはありえません。

同様に、「情報を粗視化させるような脳のパターン」が同じであれば、それによって生じるはずのクオリアが生じない場合があることは想定不可能なのです（もちろん脳を損傷していたり気絶していたり寝ていたりといった想定は脳の客観的なパターンそのものが物理的に異なっているのでここでの話とは無関係です）。

ヒュームが指摘したように（2.12 節参照）、初期条件を与えたときの粒子の運動や、薬品を混合した時の気体の発生のような物理的な「因果関係」とは、パターン同士の隣接関係、あるいは組み合わせによって成立していると考えることができます。つまり、パターンに還元できます。

一方、粗視化はパターンの「見なし方」であって、**パターンそのものは何も変わっていません**。よって、「見なし方」を変えない限り、あるパターンとその粗視化との間の関係は論理的必然となり、よって因果関係とは異なった関係となるのです。

以上より、「意識が生じるような脳の構造」と「意識が生じること」との間の関係は、物理法則のように＜すべて＞がとり得るパターンに還元できるような「因果関係」ではなく、むしろパターンそのものの見なし方、すなわち「粗視化」であるため、その関係は論理的必然となり、よって哲学的ゾンビは不可能

である、と結論づけられることになります[38]。

[38] なお哲学的ゾンビに関してはD.Chalmers氏による以下の「ゾンビ論法」が有名だと思います。以下、Wikipedhia「哲学的ゾンビ」の項目より引用します。

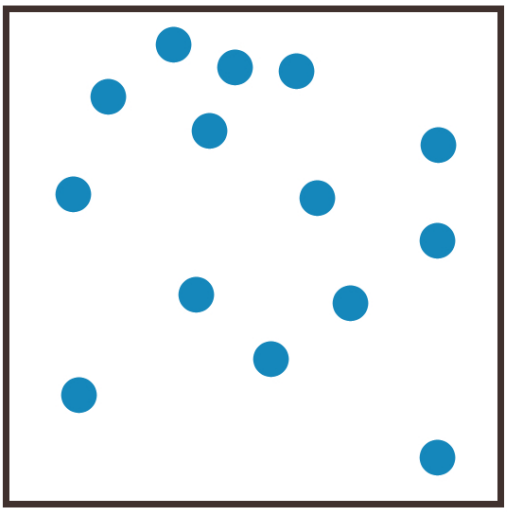
1. 我々の世界には意識体験がある。
2. 物理的には我々の世界と同一でありながら、我々の世界の意識に関する肯定的な事実が成り立たない、論理的に可能な世界が存在する。
3. したがって意識に関する事実は、物理的事実とはまた別の、われわれの世界に関する更なる事実である。
4. ゆえに唯物論は偽なのである。

「クオリアは粗視化である」の仮説に従うなら、ここでみてきたように、この論証の2.の前提が否定されることになります。

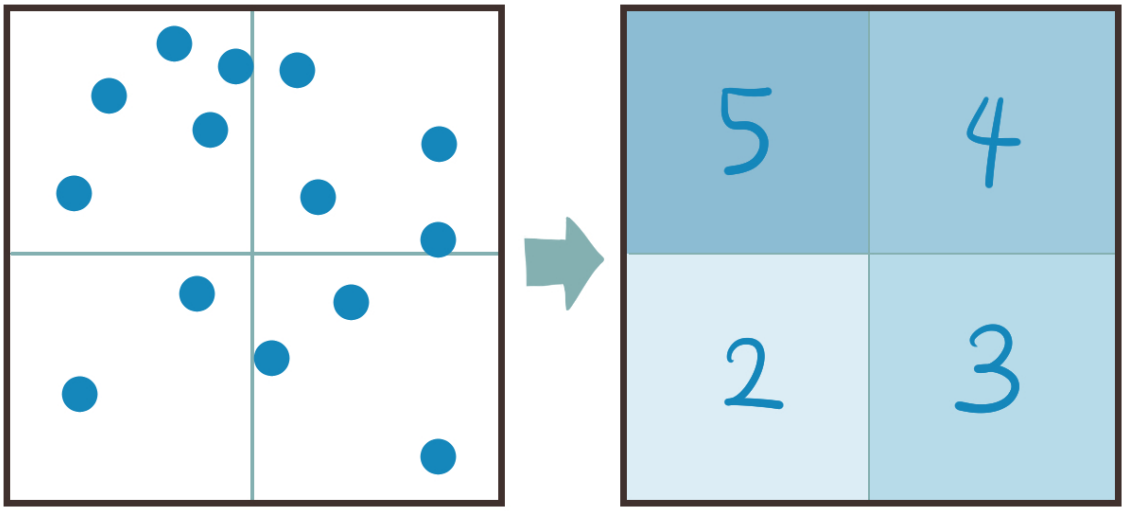
コラム３－２　粗視化の入れ子とクオリアについて

3.11 節では**クオリアの入れ子構造**、すなわち**粗視化の入れ子**というものをみてきましたが、わかりにくい面があったかもしれないので、ここであらためて「粗視化」ということが何をやっているのかを例を挙げてみていき、「粗視化の入れ子」とは何か、ということを整理したいと思います。

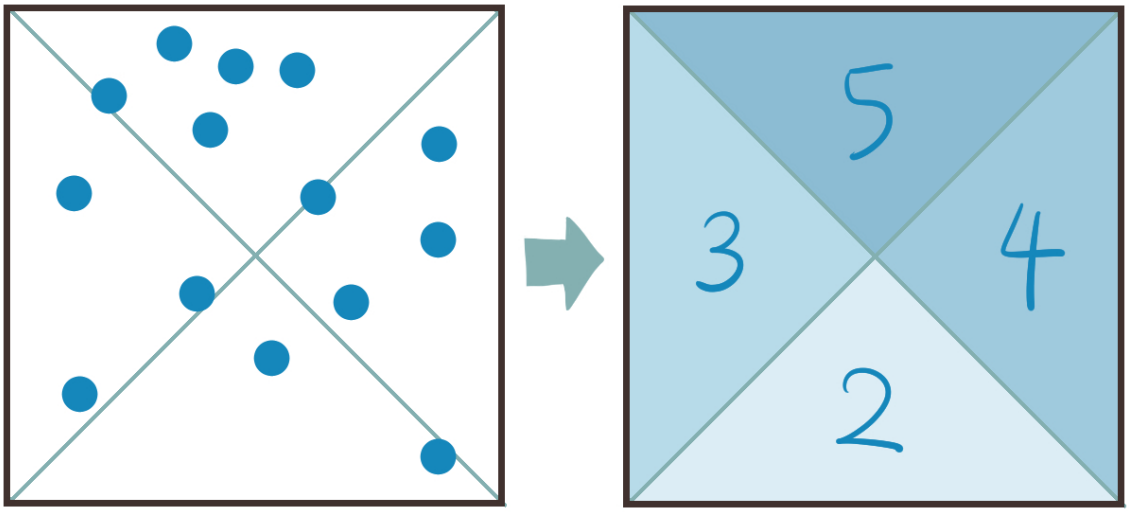
まず、以下のような、空間の中に何か粒子のようなものが分布している状態を考えます。



この時、この空間を 2×２のメッシュで区切り、それぞれの領域毎に粒子の数を数えることで、粒子の分布は２×２の密度分布として単純化することができます。これが「粗視化」の単純な例です。



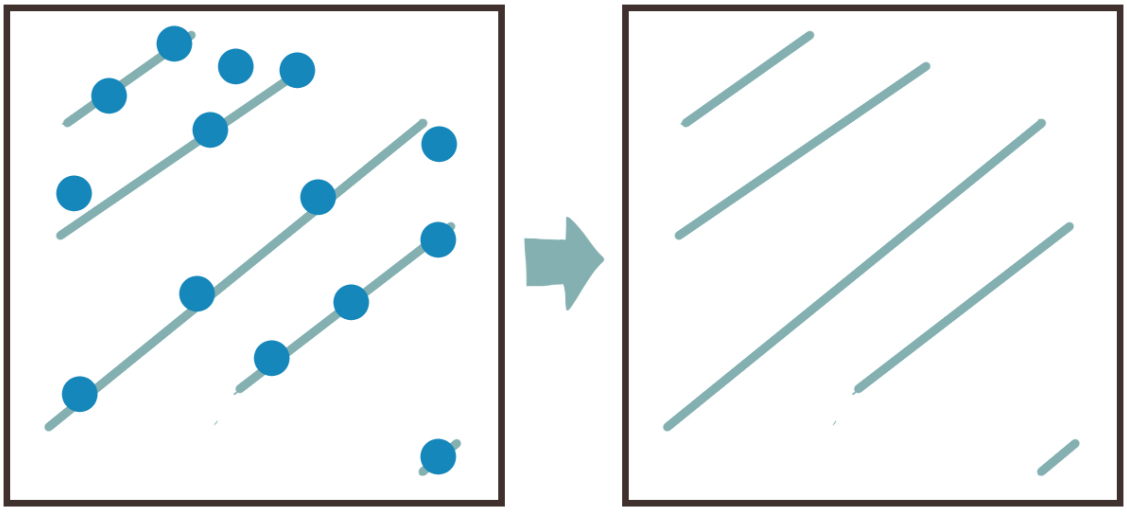
ところで、上の例では 2× 2 のメッシュの区切り方としてタテヨコに線を引きましたが、別にタテヨコではなくて以下のようにナナメに区切ってもいいはずです。



そうすると粒子の分布はタテヨコで区切った場合とは別の濃淡のパターンとして粗視化されることになります。

さて、上の二つの例では空間を区切って粒子をグループわけし、全体を単純

化させてきましたが、たとえば以下の様に、「ナナメ 45 度に並んだ粒子のパターン」として粒子を場合分けして、全体を単純化させることも可能だと思われます。

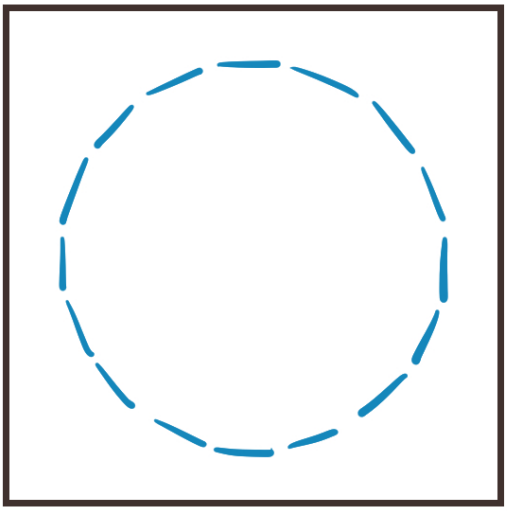


そうすると、空間メッシュで区切った場合とはまた別のパターンが現れていることがわかると思います。

以上のように、**ある情報をあるやり方でグループ分けして不要な情報を切り捨て、全体を単純化させること**、これが「粗視化」なのでした。

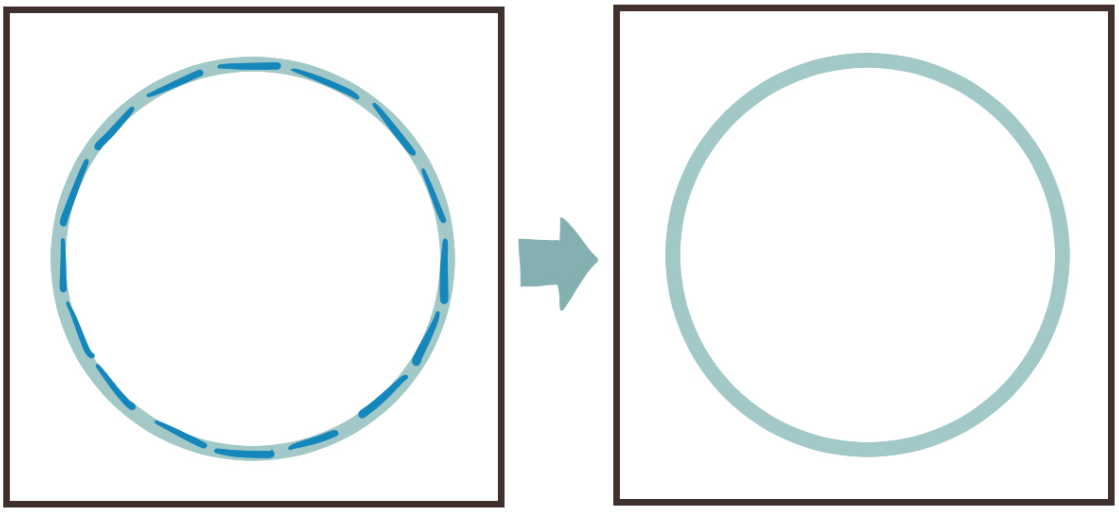
さて、上記を踏まえて、3.11 節における**クオリアの入れ子構造**、すなわち粗視化の入れ子というものについて、これが何をやっているのかということを、以下に例をしめします。

まず、ある外部からの入力情報を「線分」という形で粗視化したとします。そしてそのような「線分」という諸クオリアが空間的に配列されたものを以下のように考えます。



このとき、我々の頭ではこれを見ただけで「円」というパターンがみえてしまいますが、それは我々の頭がそういうパターン認識をしているだけであって、とりあえずこの「線分」という諸クオリアの立場からすれば、そこにあるのはただ、それぞれのクオリアがみている「線分」だけです。**それを俯瞰して眺める視点は、存在しません。**

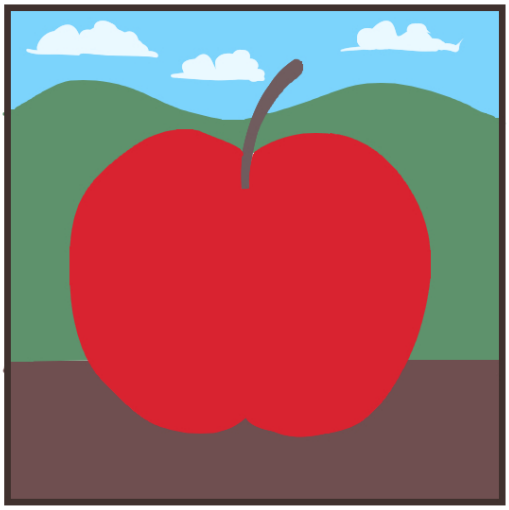
さて、これを「粗視化」という観点でみると、この空間的配列は、「線分がある場所」と「線分がない場所」といったように、以下のように**グループ分け**することができます。



そうすると、そのような粗視化によって、ただの「線分」の集まりは、「輪郭線」といった形で粗視化されたことになります。

これが「粗視化の粗視化」であり、「クオリアのクオリア」です。

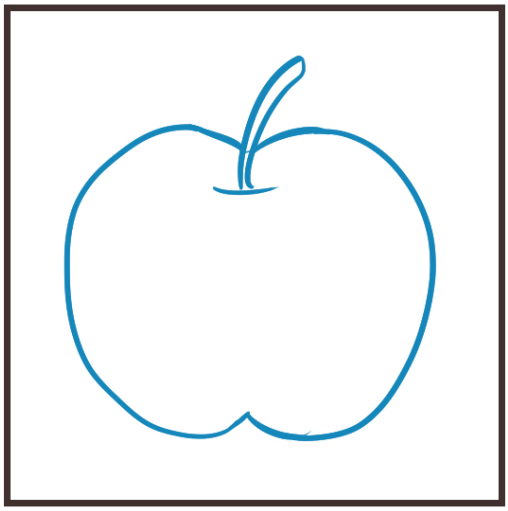
同様に、以下のような「色」のクオリアの空間配置があったとします。



これも先ほどの例と同じで、我々の頭からしたらすでに**ある果物**の形がネタバレされてしまっていますが、とりあえず色の諸クオリアの立場からすれば、ここにあるのは「それぞれのクオリアがみている色」だけです。

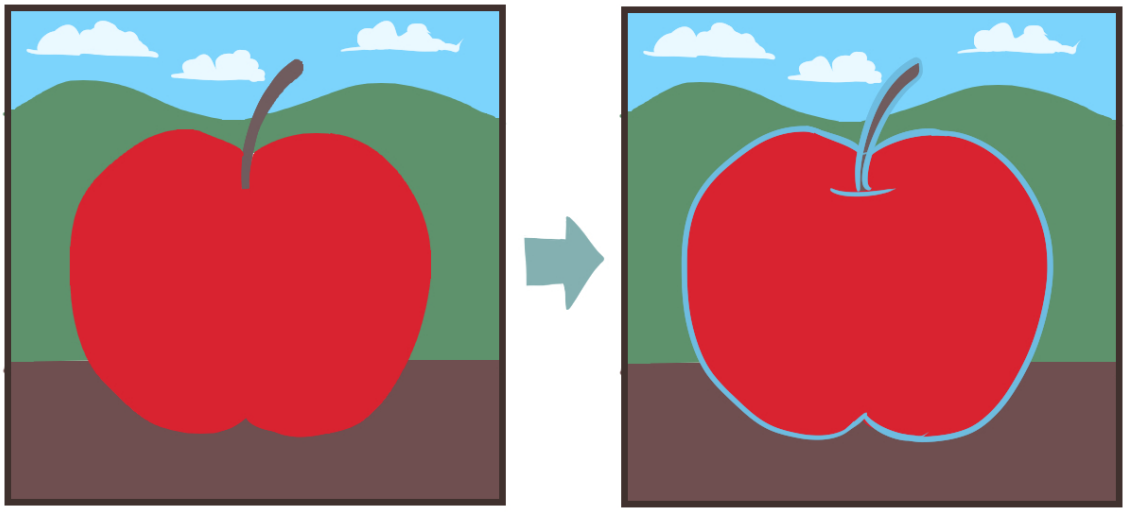
さて、上で見たように、ある情報はそれをどのように**グループ分け**するかによって**様々な粗視化が可能**なのでした。

ここで、**同じ空間的入力情報**を**別のやり方で粗視化**した、以下のような「輪郭線のクオリア」があるとします。



ここで、この輪郭線の情報を**「グループ分け」に利用する**ことを考えます。

そうして先にあげた「色のクオリア」をこの輪郭線を使って粗視化してやると、以下の様になります。



なんと、ただの色の配置の中に、「リンゴ」というパターンが浮かび上がりました。「ただの色の配置」が、「『リンゴ』と『背景』」といった形で粗視化されたのです。

以上、簡単な例を挙げて「クオリアの入れ子」というものについて説明しましたが、なんとなくイメージは分かっていただけたのではないかと思います。

コラム３－３　「波束の収束」と原始クオリア

コラムばかり続いてあれですが、整理しておくべきことだと思ったので、ここまでの議論によって得た知識を使って、改めて量子論の「観測問題」について考えてみたいと思います。

さて、いわゆる「観測問題」と呼ばれるものは、雑に言うと、

「確率的に重なり合っている量子状態を**観測**すると、なぜか知らんけど状態が定まる。そしてその過程は量子論の枠組みで説明できない、……なぜか！？」

というようなものだと思います。

そしてそれを解消するために、「観測による波束の収束」という仮定（専門用語では射影公理と言う）を導入したのでした。

しかし、そもそもの「観測」というものがいったい何を意味しているのかについてあんまり合意がとれていないことが、「観測問題」として問題になる原因のひとつであると思われます[39]。

さて、ここまでの議論を踏まえると、「観測」ということが何を意味するのかは、もう明らかだと思います。

すなわち、それは「**＜現＞にとって**の知覚」であり、つまり、**クオリアに他ならない**、ということです。

---

[39] 突き詰めると、いわゆる「観測問題」は「波束は実際に収束しているのか、それとも見かけ上収束しているようにみえるだけなのか」という解釈問題と、「なぜ意識は重ね合わせ状態で存在できないのか」という意識のあり方の問題の二つに還元できると考えています（なお、隠れた変数理論とかそういうのはここでは無視します）。

次のようなケースを考えてみます。

まず、|状態 a〉と|状態 b〉という二つの状態が重なり合った量子状態 S

|状態 a〉 ＋ |状態 b〉

があるとします。

これを、観測装置 M によって観測することを考えます。

ここで、観測装置には目盛りがついており、目盛りがとることのできる状態をそれぞれ|目盛 A〉、|目盛 B〉とします。そしてそれぞれの目盛りの状態を装置の観測によって|状態 a〉、|状態 b〉に対応づけることを考えると、量子状態 S と観測装置 M を合わせた量子系の状態は、

|状態 a〉|目盛 A〉 ＋ |状態 b〉|目盛 B〉

という重ね合わせ状態となるでしょう。

ここまでは問題ありません。なぜならこの記述はこの系を外から眺めている「わたし」の視点を＜現＞とした場合の記述であり、「わたし」が目盛りを読まない限り、波束の収束は起きないからです。

では、この状態を「観測装置」の立場からみたときはどうなるでしょうか？

仮に観測装置に意識があったならば、「目盛 A と目盛 B の重ね合わせ状態」みたいな知覚ではなく、「目盛 A」か「目盛 B」のいずれかの状態「のみ」を認識することでしょう。すなわち、

|状態 a〉|目盛 A〉　もしくは　|状態 b〉|目盛 B〉

のいずれかが状態として確定することとなり、**波束が収束**します。

つまり、**＜現＞を「わたし」に置くか「観測装置」に置くかによって、波束が収束するかしないかが変わってくる**、ということです。

いわゆる「ウィグナーの友人」です。

さて、ここで、観測装置が何をやっているかを考えてみます。

観測装置がやっていることは、状態 a、あるいは状態 b という観測結果を、目盛 A、あるいは目盛 B というように**場合分けしている**ことである、と考えられます。

そしてこれは（本稿の粗視化の定義によるならば）、まさに**粗視化に他なりません**。すなわち、そこに**クオリアが伴う**と考えられるのです（！）[40]。

もちろん、それはおそらく「状態 a」とか「状態 b」のような複雑な知覚認識などでは全然なくて、むしろ単に「ON/OFF」「ある/ない」のような二値的な、なんの感覚にも分化していないような、**極めて原始的でプリミティブな**クオリアであると思われます（とりあえず「**原始クオリア**」とでも名づけてみます）。

しかし逆に言えば、そのような**すべてのクオリアの入れ子の祖**のような原始的なクオリアでさえ波束を収束させるのですから、**＜現＞として生じるあらゆるクオリアは波束を収束させる**、と言えることになると思います。

そして、（これまでさらっと当たり前のように前提にしてきましたが）以上が「**＜わたし＞という主観的意識は重ね合わせ状態では存在しない**」という、よ

---

[40] さらによく考えてみると、そのようなクオリアは明らかに「観測されなかった可能性」との対比として成立しているように思われます。すなわち、クオリアの発生は実は**この＜世界＞で閉じてはおらず**、他にとり得た「可能世界」との関係によって初めて成り立っている、と考えられます。

く考えてみたら不可解な、不思議な事実の理由付けになると思われます。

「意識が波束を収束させる」と聞くと、なにやらオカルト的な、胡散臭い、非科学的な、怪しい響きが漂ってくると思いますが、このように考えてみると、神秘的な部分がなくなってそれなりに納得できるのではないかと思います。

ところで、よく考えてみたら「意識」というものはほとんど唯一の疑いようのない実在であって、むしろ「客観的事実」のようなものの方が本当に存在しているのかどうか疑わしい、怪しげなものであるはずなのに、なぜか「意識」を科学と絡めだした途端に胡散臭く感じられてしまうのは、なんとも奇妙なことのように思えてきます。

それがなぜかと考えてみると、おそらく「客観的事実」の方は他者と共有できる一方で、「＜わたし＞＝主観的事実」の方は原理上共有不可能なので、実証科学の枠組みでは扱えないからだと思われます。

しかし、結局そのような齟齬こそが、「観測問題」なるものを生みだしてしまう原因なのだと思います。

ということで、第四部では、「主観世界」と「客観世界」がいかにして統一されるか、ということを明らかにしていきたいと思います。